

大本教學

第三号

卷頭言……………(2)

「私の手帖」より……………出口直日(5)

神国建設の天業……………土井靖都(11)

世界情勢の変貌と立直しの実証……大国以都雄(38)

大本の基本思想……………桜井八洲雄(47)

続「大本の天業使命」の問題点……佐々木のぼる(62)

噴水……………(71)

編集後記……………(72)

大本
教
学

第
三
号

巻 頭 言

本号を大本の基本思想である「立替え立直し」に関する特集号とした。

「大本は、明治二十五年（一八九二年）旧正月、京都府綾部本宮の地において、国常立尊の神靈、良の金神の御名により、開祖出口なおに神がかりまし、三千世界の立替え立直し、みろく神世の実現を啓示したもうたのに始まる」——大本教法第二章（発祥）には明かにこう掲げられているので、「三千世界の立替え立直しとみろく神世の実現」を除いては、大本の出現は考えられないのである。

この「三千世界」とは現、幽、神三界にわたる世界で、今日でいえば大宇宙を指しているのである。しかも、目に見える物理的の宇宙だけをいうのではなくして、目に見えぬ心靈的の宇宙を含めたものである。宇宙は心靈界（靈界）が主に、物質界（現界）が従に造られている。この法則を靈主体従の法則という。出口聖師は「靈主体従が宇宙の大原則であることは、「宇宙そのものに就て考えたとして、容易に分るものではない。余りに広大で、余りに奥が深過ぎる。が、大宇宙の間には同一原則で出来た小宇宙が充満しているので、吾々はこれらに就きて大宇宙を忖度するの便宜を有している。人間として先ず手近い自分自身

を攻究するのが暁りやすい。」と述べておられるように「三千世界の立替え立直し」とは換言すれば、小宇宙たる自分自身の立替え立直しから始められるといっても過言ではない。出口聖師は「汝自身を理解せよ」と常に訓えられた。

大本は開教以来、今日まで半世紀以上の歴史をもっていて、その時代により、この「立替え立直し」の意義の把握の仕方によって、教団としても、個人としても、それぞれの実践活動が行なわれて来た。第二次大本事件後「愛善苑」の名によって新発足してから、立直し（建設）を主として、事件前のような立替え（破壊）の雰囲気は強く感じられなくなったのであるが、「三千世界の立替え立直し」はすでに完了したとしているのでは決してない。今こそ人類の危機に瀕して、大本はその本来の使命にむかって邁進すべきであるとして活動をつづけているのである。

ただ「立替え立直し」の意義およびその把握の仕方によって、われわれの覚悟、態度、努力、活動等に重大な関係を及ぼしてくるので、これにつき、いろいろな角度から見解を求めることとした。大本の本質は一貫しているが、そのいとなみとしての現実的具體化には、絶えず創造的進化を遂げていなければならぬ。この意味においては、教団自体が「自己革新」の歴史を辿っていなければならぬ筈である。

大本は、開祖、聖師、二代教主の時代を経て、今日三代教主の時代であり、報身みろくの神業の段階であるといわれる。これは言心行一致の時代であり、霊体一致の実践の時代であるということである。「立

替え立直し”ということについては、現教主は如何に教えられているか、教主の著「私の手帖より」の中から抜萃して転載させていただくことにした。

示されし道はひろらに明らけし 何今さらに迷ふ人らぞ

と、教主が詠まれているように、今さらかれこれと「立替え立直し」について論議するのもおかしなものようであるが、教団の現状はなおこれを必要とすることは否み難いのである。読者諸君は本誌を研修の資料としてさらに深く掘り下げ、大本の基本思想たる「立替え立直し」の真意義を把握して、積極的に神業奉仕の実を挙げられんことを念願するものである。

昭和三十五年十一月一日

大本 教 学 院

私の手帖より

出口直日

宗教と人間性

宗教を信仰している人には、心持の素直な、人間らしい、平凡な美しさをもっている方があります。そして、どこかものの考え方が落ついた、重厚な一種の圧力さえ感じる方があります。

○ それと反対に、宗教を信仰している人の中に——誤った信仰から——人間の人間らしい美しさを傷めてしまいその禍いに自己をむしばんでいる人もあります。

○ 後者はちょっと考えられないことのように、意外にも私はそういう面におつかり、悲しい思いをさせられることがあります。

○ 私たちにとって、一切は人間をはなれて存在し得ないものです。

宗教的精神の追求により、人間性がうすれてゆくようなことでは、宗教など却って人間には必要のない存在になるわけです。

宗教によって、本当に人間らしい生き方ができ、また社会に対して、積極的にプラスしてゆく心情が、おのずから湧き出てくるようであればなりません。宗教によって人が真理に生き、正しく時代に向う方向を与えられるのでなければなりません。さもなければ宗教は、人生にも社会にも無用の存在となってしまうです。

○ ○
人間の本性の純粹なるは、すべて神より出でて、これにより人は真に生きているものです。

宗教を信仰する私たちは、日々、自分の心情の如何について省る必要があります。そして私たちの宗教によって、人間性をさらに美化すべく、つぶさに自己の氣持を觀察してゆく必要があります。(白雲去来より)

人類の不幸を悲しむ心

大ざっぱにみても、明治時代の日本と昭和時代の日本とは、あらゆる意味で大きな変化がみられます。世界の情勢においても同様です。思想の面、芸術の面、科学の面、あるいは世界各国の国家制度の面、一世紀に満たない近年の目まぐるしい変り方は、ここ数世紀にない激しい大きな変り方をしています。しかも、その変り方が筆先に具体的に端的な言葉で示されたとおりになり、またならざるを得ないような状態に進みつつあります。「氣もない中から知らせるぞよ」と示されてある言葉どおりになって来ています。一日々々、大きな神の力が世界に働きつつあるという事実、このことにこそ、大きな神秘を感じずにはおられません。小さな神秘、低い神秘にとら

われた気持では、この大きな神祕を切実に感ずることが出来ないのではないだろうか。

筆先に示された「立替え立直し」ということについても、神さまが筆先に示されたことの一つ一つが間違いないく現われてきているのを見ると、何時かはあるものだと思っています。ただ、立替えのみを待つ人たちが思うように、その時期が何年先とか、何十年先とかいうような気持にはなれないのです。それは「立替え立直し」が迫っている」の言葉が、無始無終に生きとおしの神さまのみ心から「迫っている」というのと、わずか百年内外の生命しかない人間の生涯から割り出して「迫った」と感じるのは、同じ「迫った」ということでもそれを計る尺度に、大きな違いがあるでしょうし、また障子一枚外のことと判らない人間に、その時期などがハッキリ判るはずがありません。神さまだけが知っておられることと思います。

ただ私は、「この秋は雨か嵐か知らねども今日の務めに田草とるなり」の歌のところで、日々をつつましく、楽しく、学び働かして貰いたいと思います。もし私の生存中に、そのような時期がきたらやはり驚くかも知りませんが、少しでもあわてふためくことのないように、自分自身を練ることに務めたいと思っています。

「立替え立直し」ということに関連してのことですが、信者の中には、世の中になにか大変なことが起ると、それは人類にとって不幸な出来事であるのに、筆先どおりのことが起ってきたといって、歎ぶような人のあるのを見受けることがあります。そういうことを見受けるたびに、私は割り切れぬ気持にならされます。親類や知人から、迷信とあざけられ排斥されながらも、一すじに大本の教えを信仰しつづけてきた人たちが、筆先に示してあるとおりのことが起ったということから、自分の信じてきたことが間違ひなかったというので、その歎びから出る言葉ということがわからぬではありません。しかし、信仰の本当のところからは、そのような歎びよりさきに人類の不幸に対する大きな悲しみが湧いてくるはずで

教祖さまは、その生涯を世界の大難を小難に、人類の不幸を幸いにと、朝夕一すじに祈りつつけておられました。そのお姿が今でも強い印象となって私の胸に宿っています。

国々にきたる大難小難にのがせ給えと祈る御開祖
と教祖さまを偲び、

大難は小難なれや小難は無難にすめと祈る節分

と、詠んでいる母の一生も、ひたすらに人々の幸せを念ぜずにはおれぬ心で貫かれておりました。

人柄がいくら純朴でも、信仰がいくら熱心であっても、人類の不幸な出来事に対して、悲しみの心の起らぬような信仰のあり方は、どこか信仰の籠かごがはずれているのではないでしょうか。大難は小難にと祈らずにおられぬ心、人類の不幸を悲しまずにおれぬ心、これが本当の信仰者の心であり、うつくしい心であると思います。

(うつくしい心より)

神の啓示と常識

大本のお筆先にいわれている△立替え▽が、今もって行われていないように考え、△立替え▽という言葉、何かの天変地異によって地球が洗い替えられるようなことで、ただその時を待望するといった受取り方をされたとすれば、これは、お筆先に對して、あまりに眼のつけどころが低いということになりましょう。

△天変地異▽では立替えは出来ん——ということとは、お筆先にも書いてあるのです。神に代って祖母のいわれたことは、その時には分らないように立替わっています。今日、時間が経ってみますと、こんなに大きく世の中が変って来たことに驚かされるばかりです。

四季のうつり変りにしても、夜と昼の変わり目にしても、少しずつズン／＼と変わってくるもので、その一瞬だけをつかまえて、それを感じることは困難なことです。それには鋭い観察力が要りましょう。けれども、永い時間をかけて、これを見る場合には誰にも納得がゆくはずで。

——世に落ちておりた神が世に出る——ということも、その通りになってきています。

それがわからないのは、歴史をみる力のない幼稚さから来るものです。

ややもすると、自分のなすべき努力もせずに、社会のために働くことをおろそかにし、現実から足を浮かせているような、或る種の間人は、突飛もない考えに頼る弱点をもっています。

私たちの少女のころからみて、いまの若い人々の、ものの考え方の変わり方、社会全般の思想の大きな変わり方はどうでしょう。それが理解できないとすれば、それは、滑稽というよりも、気の毒に思えばかりです。

そのように、この教えに対する低い理解力で、この教えが伝えられるとすれば、指導の仕方が悪いということになるかも知れませんが、これは人々の良識というか、むしろ、常識にまつより致し方がありません。靈智も靈覺も、その先端は常識に結びつくものであり、人智を超えた神の啓示も常識的にうなずけるものとなるはずであります。これは忘れてはならないと思います。そうして、日々の正業にはげみ、社会の歩みとともに悩み、それを解決するために現実的に努力することが必要です。

○

筆先には大峠のくることを明らかにしてお示しになっています。筆先に示されてありますことは、みなその通りになつて来るものでありますことは、これまでの歴史が証明しています。ここ五六十年の、思ってもみない世の変わり方を見てもそれはわかります。——といつて、いたずらに心を奪われ、騒いだところで、人間にどんなことが出

来ましよう。お筆先のお示しは、人の心をおどかすためでもなく狼狽さすものでもないことは分り切ったことでその一つ一つを心をしずめていただき、そのみ旨にそう心構えと、日々の行いを高めることが大切であります。

百姓であれば、米や麦を熱心につくる暮し、人間の努力をかたむけて、なお神に祈り、力かぎりの努力をしてゆく、それは自分の暮しの上だけでなく、広く世の中のために働き、意義ある運動に奉仕し、そういう生活の中で、人間が天国に帰る日のために、自分のところを養い育ててゆく、ゆとりのある暮しを怠らないことであると思えます。(調和を求めてより)

神国建設の天業

「立替え立直し」

土井靖都

三ぜん世界の立替え立直しをいたすぞよ。用意をなされよ。この世はさっぱり新まにいたしてしもうぞよ。三千世界の大せんたく、大そうじをいたして、天下太平に世をおさめて、万古末代つづく神国の世はいたすぞよ。

これは明治二十五年旧正月、開祖御発声による劈頭の神諭である。大本出現存在の根本大義の御宣言である。

大地本来の主宰神国常立大神が時節到来して、永き御隠退より、「良の金神」の御名によって再び表てに顕れ給い、永遠不滅、万古末代つづく神の国を建て給うべき天業が開始せられたのである。その神の国は「世界中に神徳がひかりかがやく神国」であり「水晶の世」である

かかる水晶の世で神徳のひかりかがやく神の国を建て給はんがためには、一切の穢れや、邪悪を被い浄め給い「三ぜん世界の大せんたく、大そうじを」されなければならぬ。その上に神の国、水晶の天下太平の世が建設せられるのである。それが即ち「立替え立直し」である

世の立替えは世の元から経綸しぐみしてある事が、一分一厘違はん、皆出て来る時節が迫りたのであるが、

此経綸は変りは致さんなれど、世の立直しは人民の肉体を使ふて致さねばならぬ事であるから、人民の改心次第で速くも成り、亦遅れも致すから、(大正七、旧一〇、二九)

「立替え」は基礎工事、「立直し」は上部工作であり

立替えは大体神によって行われ、立直しは、神意に基き神力を仰ぎながら、人間によって行われるものであって「立替え」と「立直し」は不離一体のものである。

一 天の御命令による天業、また天神地祇の御協力による天業

この立替え立直しの天業は国祖（大地の祖神）独自の御計らいでなされるものではない。天主の御命令をうけ給い、御三体の大神が地上に降りて御手伝いあそばされ天神地祇御協力による空前絶後の天業である。

神論

良へ落されて居りた元の国常立尊に、三千世界を弥勒の世に擁護へよとの天の御命令を戴いての今の御用であるぞよ。（大正三、旧七、一四）（かっこ内の日附は神論御執筆の日附）

今度の二度目の世の立替えと申すのは、さっぱり世の洗い替えであるから、何につけても大望であるぞよ。今度の大望は天ばかりでも出来ず、地だけで

も出来ん事であるから、三体の大が地上に降りて手伝ふてやらんと、地丈では出来んぞよ。（大正元、旧一〇、五）

天の御先祖様は日の大神様なり、天照皇大神宮殿地の世界の先祖が国常立尊、竜宮の乙姫殿、日出の火水を御使い成されて、夫婦揃ふて、天地の大神の片腕に成りなされての御活動であるぞよ。岩の神殿、荒の神殿、風の神殿、雨の神殿、暗剣殿、地震の大神殿、金神殿の行状の何も揃ふて出来る御方、選り抜いて使ふぞよ。（大正四、旧八、二八）

二 世界統一、天と地との誠の

王で治める天業

世界中を榊掛を引いて、世界を創造た、天と地との先祖の誠の王で、万古末代善一つの神国の王で世界を治めて、口舌の無い様に致すぞよ。天は至仁至愛真神の神の王なり、地の世界は根本の国常立尊の守護で、日本神国の万古末代動かぬ神の王で治め

るぞよ。(大正五、一一、八)

今度の二度目の神政成就たてかえの経綸は、人民の知らん事であるから六ヶ敷のじゃぞよ。今が世界の大洗濯の初発であるから、(明治三六、旧六、八)

日本の国では、絶対に天地が潰れても用ゐられん民主主義を唱へる鼻高が出来て来て、何も知らぬ日本の人民が、学者の申す事を信じて、夫れに附和雷同して、約まらん事を致すように曇りて了ふて居るから、今が、世界の性念場であるから神が永らく苦勞して、人民に気を附けるので在るぞよ(大正八、三一七)

民主主義といわなければ、現代人として全く通用しないようになってはいるが、日本は神示によれば、民主主義は絶対に用ゐられない国である。而かもこれは、日本だけのことではなくて、「世界中を榭掛を引いて世界を創造しつゝした天と地との先祖の誠の王で」治めらるべきであるから結局、世界が民主主義政治ではなく、神政政治となるべきである。現在の日本の民主主義には「神の下に」とい

うような理念は全くなく、ややもすれば、人情や礼節や義務の観念すらおき忘れられ、權利と自由という言葉のみが鵜呑みにされ、日々渾沌を來し、所詮は末の日の容相を露呈しつつある有様ではなからうか。神政政治は、神意に基く、愛と正義による清明大和の政治であつて、專政政治や封建政治の謂いではない。神が「世界の国会開き」をいたされることが示されている。現在の大本そのものも民主的ではなく、神政的ではなからうか。

三 後にも前にも無い、絶体絶命の天業

昔から二度目の世の建替えであるぞよ。絶命の世に成りたから、何も出口に書きおかせるぞよ。(明治三三、六、一〇)

今度の二度目の大立替えは、末代に一度ほか無い大望な世の立替えであるぞよ。(大正元、旧一〇、

五)

天の王と地の王とで、根本から三千世界の立替えを致して、世界には国の奪り合ひと言ふ事の無いや

うに、日本の国の靈主体ひのこの生神が守護いたしての二度目の世の立替えであるぞよ。……今度の二度目の世の立替えは後にも前にも一度より無い、大望で、世界中の三段に分けてある御魂を立別けて了ふて、(大正四、正、二三)

天からの時節で、何も出て来るのであるから、良の金神も何う致す事も出来ないのであるから、夫れ迄に一人なりとも改心さして助けたいと思つて、今まで苦勞艱難いたして知らしたのであるぞよ。新つ洗替の世になるのであるから、……此事は明治二十七年の七月の差入りの筆先に書かしてあるぞよ。良事も厭いやな事も、一度出してある事は、遅し速しはあるなれど、皆出て来るぞよ。……今年で二十七年であるが其間昼夜に知らしてあるぞよ。(大正六、旧一一、二三)

神示によれば、今度は二度目の世の立替え立直しである。そしてそれは、「末代に一度はか無い」「後にも前にも一度より無い」「天からの時節で……良の金神も

何う致す事も出来のである」と仰せられ、そして「遅し速しはあるなれど、皆出て来る」「神の申したことは一分一厘ちがわんぞよ。毛すじの横はばほどもまちがいはないぞよ」と示されている絶体絶命の「三千世界の立替え」である。

この「世の立替え」「二度目の世の立替え」という御言葉は、発表されている神論の中だけでも幾百千回くりかえされてあるのであつて、聖師は、「隨筆」に「現一万冊の神論も、詮じ約むれば、世界改造の四文字に帰着するのである」と申され、「大本言靈解」には、「元来大本教祖に由つて現はれたのは二十七年間の世の立替え立直しの神論斗りであります」と記るされている次第である。

四 立替え立直しの意義、内容

立替え立直しの意義、内容は、本文の初めに掲げた神論において既に明かであるが、なおこれに関する神論、聖訓をあげて少しく詳述いたしておきたい。

(一) 立替え立直しは靈界、現界にわたる天業

あとにもさきにも末代一どよりないたいもうな、
靈魂界みたまと現世界このよとの大革正たてかえであるぞよ (明治二六、
七、一二)

綾部の大本、地の高天原に変性男子と女子の御魂
が現はれて、三千世界の神、仏事、人民の審神者あうためを
いたすから皆その覺悟をいたさぬと俄にトチメンボ
ウを振らねばならぬから、永らく知らしてあるぞ
よ。——

立替え立直しの天業は、靈界、現界兩界にわたる天業
であるが、本文には専ら現界の事についてのみ記述する
次第である。

(二) 神の國、水晶の世の建設

用意をなされよ。世の立替えは新つの洗ひ替えて
あるから、みろくの神の世に立返りて、万古末代善
一筋の世に成る尊い事の初りであるから、皆の人民
の思ひが違つておるぞよ。(明治一年一月一日)
この神があつれば表になりたら、世界を水晶の世

にいたすのであるから、改信をいたしたもつから、
早くよくいたすぞよ。(明治二六、一月一日)

これまでお筆先で出して居る通りに、何事も世界
に成りて来るぞよ。従來の事は、何も些とも用ゐら
れん様に成るのが、世の変はるのであるぞよ。(大
正六、旧八、二二)

人民が神をおしこめて、天地の所有物をわが力
とり勝ちにいたしておるが、世界の万有ものは一たん天
へひきあげるぞよ。(明治三二、二、一日)

靈魂物語第一篇、言靈解、

要するに、所在あちこち汚穢を清め塵埃を払ひ、風と水と
の靈徳を發揮して、清淨無垢の神世を玉成し、虚榮
虚飾を去り万事に渡りて充実し、活機臨々たる神威
を顕象し、金甌無欠の神政を施行して、宇内一点の
妖邪を留めざる、大修被の大神業を言うのである。現
代の趨勢は、世界一般に美曾岐みそぎの大神事を嚴修すべ
き、時運に遭遇せる事を忘れては成らぬ大本の目的
も亦、この天下の美曾岐を漸行するに在るのである

二度目の世の立替えは、「みろくの神の世」の建設であり、「新つの洗ひ替え」で「善一筋」の「水晶の世」の樹立である。「世界の万有は一たん天へひきあげ」給い一切万事改まるのである。

聖師御歌（以下肩書を附けないで挙げる御歌は、皆出口聖師による聖歌である）

何もかも一さい万事あらたまると宣らせたまひし開祖かしこし

（三）めぐりの借錢濟し

今度二度目の世の立替えは国の借錢、所々の身魂の借錢濟であるから、身魂が悪るい働きをして居る国土から、借錢濟しを始めるぞよ。……罪穢の多大い所には惨烈い事があるから……国々、所々、家々に身魂に借錢の有る丈の事は何でなりと借錢を皆済して了はねば、世の元の荒神の御揃になりて御守護あり出すと、中々世界の混雑と成るから、大峠と成る迄に改心を致して身魂を磨いて居らんと、大峠越すのは辛いぞよ。（大正四、旧五、四）

罪穢の甚深い所には、甚大い借錢がある由って、厳酷い審判があるぞよと申して知らしてあろうが、……百方言ひきかしても、頑張りて聴かぬ身魂は、根底の国へ落ちて了うから、今度は最終であるぞよ。（大正、四、旧六、一一）

神の国、水晶の世を建て給わんがためには罪惡、醜穢を被い。淨め給わなければならぬ。ひっきょう「国々所々、家々、身魂に借錢の有る丈の事は何でなりと借錢を皆済して了はねば」ならない。

（四）靈魂の三段の立て分け

靈魂が混ぜ交ぜに成りて了うて居るのを立別けて、良き靈と悪き靈魂とを区別して、日本は水晶の世に致して立直さねば、神国であると言う事が判らんから、（明治三七、旧七、五）

今度の二度目の世の立替えは、後にも前にも一度より無い大望で、世界中の三段に分けてある御魂を立別けて了ふて、惡の靈魂は日本の国には置かん事に致すぞよ。（大正四、正、二三）

大國常立尊が世界へ現はれて、三千世界の三段に立分けてある靈魂を、それ／＼に目鼻を着けねばならんと言う事が、筆先に知らしてあるが、時節が参りて来たから、……先づ第一ばんに、上中下の立別けてある靈魂に目鼻を着けて、（大正四、四一一、六）

三段に身魂を分けて、夫れ夫れに目鼻を着けて、改心が出来た産ぶの身魂から、それぞれの事を為さねば成らんから、何が大望と申しても、身魂の立替え立分けが一番困難な骨の折れる事であるぞよ。（大正六、四、二六）

「三段に立分けてある靈魂」とあるが、「立分けてある」ということは度々繰り返し示されてあることで、既に靈魂は三段に立分けてあるのである。これに目鼻をつけ、その所を得せしめ給うことが、今後にある次第であるが、この事は神にとつても最も六ヶ敷い事であると申されているのであって、この靈魂の立分けとか、それに目鼻をつけることは、全人類の靈魂の因縁性を悉く知

り給える国祖良の金神様の外には、どの神も出来ない事であると申されている次第のもので、神の国建設の基礎的御神業である。

回教コーランにもこの三段の立分けが示されている。

大慈者、大慈者アルラーハ（天主）の名によりて不可避事の来る時、何者もその来るを虚妄と呼ぶを得ざらん。此時或者は駭おどされ、或者は挙げられん。

此時大地激しく震撼し、群山粉粹して、塵埃となつて四散せん。

此時汝等は三類に分たれん。第一は右方の衆。右方の衆とは何ぞ。第二は左方の衆。左方の衆とは何ぞ。第三は地に於ての首先者、天に於ても首先者なり。（第五十六 不可避者章一一〇）

神論には、「天が地となり、地が天となる」とか「牛のくそが天下をとるぞよ」とか申されてあるが、今の世は「強い者がちの世」であり、「獸の世」であるから、みたまの位格が正され、その立分けがあり、上下がひっくりかえされたりする次第である。中国の梁の武帝の

時代、今から千四百年ほど前に宝誌禪師という高僧があった。達磨大師が中国に渡来された当時の人であるが、最も勝れた靈能の大徳であった。この誌公が野馬台の詩という予言録を書いて残している。これは日本の歴史の運命を歴年的に予言せるもので、皆その通り出て来ているといわれている。その詩の終りに日本の荒廢までが述べられているのであるが——立直しにわたっては述べられていない——その荒廢の来る前に「猿犬英雄と称す」とある。今は猿犬が天下をとっている時代である。この荒廢や猿犬云々は、ひとり日本だけのことではない。世界おしなべてのことであるべきである。この野馬台の詩にも重大なる明示がある。

(五) 立替えの方法

うえへお土があがる所もあるぞよ。お土がさがつて海となる所もあるぞよ。これも時節であるからドウも致しようがないけれど、一人なりと改信をさして、世界をたすけたいと思つて、天地のもとの大神さまへ、良の金神が、昼夜にお詫をいたしておるぞ

よ。(明治二六、一月一日)

このうえは天災でみせしめをいたさならぬことが出来るから、改信いたしてください。天災のみせしめはこわいぞよ。(明治三一、四、一六)

戦争と天災とが初まりたら、人民が三分に減ると初発の筆先に書いてあるけれど、茲に成ると、世界に残る人民二分位より無いぞよ。日本の国は誠の者が二分残る仕組であれど、(大正六、旧九、五)

二度目の世の立替えは大陸が起つたり、沈んだりし、最後の大峠たる大戦とか天災地変とかにより「世界の人民三分になるぞよ」というほどの空前絶後の大事変である。この「三分」になるということは人類二十九億の存亡にかかる大事であり、従つてまた立替え立直しの基本的意義の存するものであるから、その意味、真義はあくまでも明確にしておかなければならない。これを等閑、曖昧に附しおくべきものではない。

(六) 「世界の人民三分になるぞよ」

世の立替えであるから、人民三分になるところま

でいくのであれども、天地のおん神さまをお願い申して、大難を小難にまつりかえて、人民を助けるのであるぞよ。(明治三〇、八、二九)

とあるから「三分」とは限られたことではない。四分になるか、五分になるか、もっと多くになるかも知れないと考えられ得る。もとより多く多く残されるほどありがたいことである。また

何彼の事、神界、^{かみ}仏界、人民、鳥類、畜類、餓鬼に成りて居るものまでも助けならん大望な二度目の立替であるから、(大正七、三、一五)

とあるから、神の大愛により、次第によっては「大峠」とか「人民三分になるぞよ」とかいうような立替えは無くすむのだというような楽天的な考えもあるようであるが、前記大正六年旧九月五日の神論に「日本の国には誠の者が二分残る仕組であれど」と示されており、これは当初より先きを見すかされての御言葉であり、また

今の世界の守護神人民の心では三分も助ける身魂が無いぞよ。誠一つの天地の先祖は違つた事はチツ

トも申さんぞよ。(大正六、旧五、六)

今度は世界が三分になると毎度申して知らしてあるが、世界は三分になるぞよ。(大正六、一一、二)

三)

開教二十六年を経て、開祖御昇天一年前後において「今の世界の守護神人民の心では三分も助ける身魂が無いぞよ」「世界は三分になるぞよ」と断定的に示されていることを深く畏まなければならない。

悪が九分九厘のところまでこの世をもち荒したゆえに、天地の大神さまは、なかなかきびしき御氣障りがあるから、このほうが世界の人民を助けたさにいろいろと苦勞をして、悪くいわれても、ちっとも氣に障えずに、天地の大神さまへお詫をいたして、十分のところを三分に許しておもらい申すのであるが、改心できずいつまでもがんばりておるとこのほうの堪忍ぶくろが破れたら、どんなことがありても不足は申されまいぞよ。(明治三二、三、一日)

斯の終りの世が来るのが神界には能く判りて居り

ての、大望な世の立替え建直しの経綸が為であるの
じゃぞよ。何事も時節であるから、斯んな惨い世に
成るのも、良の金神が世に落されたのも、世に上る
のも、昔から定まりた因縁事であるぞよ。魔法の世
が来るのも、世の太初から良く判りて居りての今度
の経綸が致してありたのじゃぞよ。(明治四三、旧
四、一八)

元来全部ダメな所を大悲大愛の国祖が、天の大神にお
詫びくだされて「三分に許しておもらい申」されたので
あって、このことは本来、宿命的に申さば全部ダメな次
第であったのである。そして「斯の終りの世が来る」こ
とも「魔法の世が来る」ことも「世の太初から良く判り
て居」られてのとであって、昔より人類救済の手を尽さ
れ、釈迦を降し、孔子、老子、キリスト、マホメット其
他多くの聖賢を降し、時所位に應じて、法を説き道を布
かしめ、また神示によれば、国祖御自身が種々の者に化
けて出で、救済を行い給い、なお且つ二千六百年頃にな
れば、いよいよ末法の世、世の結末をつけなければなら

ない時の来ることを明知し給えるが故に、バハイズムを
興し、大本を立て、道院を設け、その他世界に出来るだ
けの救済の機関をつくり給える次第であって、大本にお
いて申さば、開祖を降してお筆先を書かしめ、終末来を
告げしめ、道を教えて、改心を迫らしめ、七十六歳の御
高齢まで寒夜にも水行をなして、大難を小難にと祈りつ
づけしめ、聖師を降して大道を世に布かしめ、全人類の
ために古よりの「世間諸劫の障を受」けしめ(道院、老
祖訓)つまり十字架を負わしめなどされ、多くの使徒や
信者がこれに奉仕し、協力して天業を進めしめられ、か
かる神の御計ひ、御企図、御経綸により、天人の協力、
努力によって、この世が泥海にもなる所を転じて大いな
る救済が行われる次第である。

なお「十分の所を三分に許して」ただだかれたとある
から三分は三割のようにとれるが、この十分は全体と
いう意義である筈で、聖師は「三分は三割ではない、百
人に三人ということじゃ」と仰せられている。

モウ気のつけようがないぞよ。わかりた人民から

改信をしてくださらんと、世界の人民三分になるぞよ。(明治二九、旧一二、五)

この神論を一寸拝読すれば、「わかりた人民から改信してくださらんと、世界の人民三分になるぞよ」とのことであるから、三分だけは本来、ほっといても残る筈のものである。であるから、「三分」ということはその意味のことで、結局最終的に救われ得る見込の者が三分だということの意味のことではないという解釈もされるようであるが、「モウ気のつけようがないぞよ」と仰せられて、これまで充分に気をつけてあり、救われ得る者も既に若干はあり、今後救われ得る者の見込も大体つけてあるのであるが、なお出来るだけ多くの者を救ってやりたいとの思召で、此上とも「わかった人民から」一人でも多く早く改信してくれなければ、結局三分位になって了うぞとの意義であるべきであって、無数に出て来る「三分」に関する神示によるも自から明日なるものがある。ものは総体的に見来るべきであって、一部にこだわれば真義を誤る虞れが多分にある。

三千世界の三段に別けて在る御魂を夫れ／＼に立替え立別けて、目鼻を附けて、先づ是で楽じゃと申すやうに成るのは、大事業であるぞよ。二度目の世の大革新は、戦争と天災とで済むやうに思ふて、今の人民はエライ取違を致して居るなれど、戦争と天災とで人の心が直るのなら埒能う出来るなれど、今度の世の立替えは、其んな容易い事でないぞよ。(大正四、旧一二、二)

この神論により、大峙たる最後の戦争とか天災とかいうようなものは無いのだという考えもあるようであるがこの神論は戦争と天災というものだけで立替え立直しの天業が簡単にゆくものではない。三段に別けてある御魂をそれ／＼に目鼻を附けて、所を得せしめることから、その他あらゆる方面の経綸をしなければならぬのであるとの意義で、最後の戦争や天災というものはないのであるとのことではない。そしてこの最後の戦争とか天災は改心せしめるためのものではなく、大掃除の終結でなければならぬ。前記神論に、

戦争と天災とが初まりたら、人民が三分に減ると
初発の筆先に書いてあるなれど、茲に成ると世界に

残る人民が二分より無いぞよ。(大正六、旧九、五)
と示されており、「初発の筆先に書いてあるなれど、茲
に成ると」と含蓄の深い神論であるが、最後の終結はか
かる事象によらるべきことが畏まれる。これは古来、現
代における幾多の予言に鑑みるも、しか想定せざるを得
ない。全体、世界の人民三分になるといふが如きことが
局部的小事変によってあり得る筈がない。昨年の世界の
人口は四千八百万人増加している。今の二十九億が十年
後には三十五億になると報告されている。

後の修理固成の大望がなかなか骨の折れることで
あるぞよ。一色や二色や三色や十色でないぞよ。何
につけても大望ばかりであるぞよ。(大正元、旧一
〇、五)

この神論によるも戦争と天災だけで立替え立直しが簡
単にゆくものではないことが示されている。

(七) 「大峠」

「大峠」ということもくりかえして申されているが、
「大峠」と「三分」になるといふことは詮ずる所、同一
意義に帰着するものと考えられる。大峠を肯定しなけれ
ば三分も肯定出来ないことになる。

三千世界の陸地おちの上の守護致して、神、仏事、人
民を安心させてやるぞよ。そこへ成るまでに世界に
は、モ一つ立替えの大峠があるから、一日も早く改
心いたして神に縋りて、誠の行いに替えて居らんと
(明治三五、五、一一)

見て御坐れよ。立替えの真最中に成りて来ると、
智慧でも学でも、金銀を何程積みても、今度は神にす
がりて、誠の神の力で無いと大峠は越せんぞよ。：
：此神の造った陸地おちの上には居れんやうになるから
改心を致して、身魂を能く研いて居らんと、(大正
五、一一、八)

今の人民、神がいつまで言うて聞かしても、人を
嚇おそす位にはか能うとらんから、一度にバツイても
間に合はんぞよ。俄の信心は役に立たんから、常か

ら信心致せと申して知らせてあるぞよ。世界に恐い事が出て来だしたと申して逃げ込んで来ても大峠の真最中になりたら何程力量の在る神でもソナ事に掛りては居れんやうに忙しくなるが、常に信心を致せと申して爰まで氣をつけてあるぞよ。(大正七、旧一、一七)

中々今の役員の思うて居る様な立替え立直しの経緯で無いぞよ。九分九厘迄いった処で一厘の経緯は人民には解らず神は今迄肝心の仕組はドンナ結構な身魂にも明かして知らすと云う訳には行かぬから、

(大正七、二、二七)

聖師による神論

世界の大峠が来る迄にこの大本に大峠があるぞよ

(大正八、一、二五)

聖師の「隨筆」

いよいよ審判の日が来てもその瞬間まで新に神からの通知は無いのである。(大正八、七、一五)号

神霊界誌)

大本の大峠は昭和十年の大本弾圧事件で、一時に、突如として来たもので、大本は解散され、建造物は破壊しつくされ、聖師、二代教主を始め多くの者が永く獄裡にとらえられた。最後の世界の大峠もかかる次第のもので終結的に突如として来るもので、ダラダラと局部的に起る事変の寄せ集めの謂いでは無い。九分九厘いった所で一厘の仕組と申される次第のものであって、今既に大峠の進行中だと見る向きもあるが、昔から戦争や天災はありつづけている。聖師の「惟神の大道」の中に「我國の記録に存するものみにとも大小一千有余の震災を数へることが出来る。其の中で最も大地震と称されてゐるものが百二十三回、鎌倉時代の如き平均五年目毎に大地震があったのである」とある。但し最後の大峠を肯定していえば明治二十五年からの戦争とか天災とか諸種の災厄は總括的に立替えの一部ということは出来るであらう。併しキリストが世の終りの兆しとして弟子たちの問いに答えて「民は民に、国は国に逆ひて起たんまた処々に饑饉と地震とあらん、此等はみな産みの苦難くるしみの始めなり。(マ

タイ伝、二四の七、八）と申された如く、むしろそれら諸種の災厄は、世の終りの兆しと見るべきで、大峠そのものでは決してない。道院の壇訓にも、

大道修渡真諦卷七

老祖訓に曰く、劫氣起伏の數年年なり。無限の殺機大千に遍く、末日分明にして、審判有り。……而して循環の間、転移の下、則ち必ず一番の総結束、亦必ず一番の大靡爛有り。夫れ然り、後始めて然る可く漸漸否、塞がるに由りて大和の象見え、離乱を變じて治平の麻（いこう）を成すなり。現に各地に兵匪炮火、早滂（ひでりとおおなみ）の互に呈する在り世人に在りても未だ必ずしも以て此の時の災劫を否の極、乱の極にして災劫已に極点に達せりと為さず矣。殊に此時は乃ち結束の見端に過ぎず。亦靡爛の起点に過ぎざるを知らざるのみ。苟しくも総結、大靡爛の機一たび至らば、吾は災劫の世界に瀰漫する者、必ず一地一國に止まらざるを恐るるのみなり。凡そ普天の下、全球の土を挙りて芸芸の衆生、顛沛流離

戕殺死亡、其の慘痛其の困苦、則ち必ず更に想ひを設くるに堪えざる者有るなり。

老祖は天主であらせられる。この訓によると大峠は局部的の兵火、早水などではなく、世人もこのことを知っていて、これらを以て大峠だ、災劫已に極点に達したとは為さない。そして総結果、大靡爛、大峠の機一度至らば、それは全世界に瀰漫するものであるということが明示されている。

結局、最後の「大峠」を認めないというならば、神示の立替えの意義を没却し蹂躪せるものであって、立替えの否定者である。そして大本は六十余年にわたって人心を惑わし、多くの人をあやまった迷信邪教であるということ暗黙に而かも明白に宣言している者であるべきである。但し大本信者の名を有するものとしては、正面より立替えを否定するというものは一人もなかるべく、立替えの解釈が違っただけだといひ、その正当性すら主張するであろう。なお神論は意義深遠にして、聖師は、お筆先は十二通りも意義があると仰せられたが、もとより靈

的意義の存する場合は多きことであり、譬喩の場合もある。しかし当然文字通り現界的の意義もあるべきで、これは今日までの事実が明かにしている。戦争でいえば日清、日露、世界戦争から、日本の敗戦までが予告をさされておき、第一次大弾圧事件に関する年月日などは、三年前から示されており、第二次世界大戦の起結については、二十三年、三十三年さきの年月日まで明示されている。世のうつり変りや、何かの起伏、皆神示の通りになって来ている。由来、真の予言というものは人間に出来得るものではない。「その日その時を知る者なし天の使たちも知らず子も知らずただ父のみ知り給ふ」(マタイ伝二四の三六)とキリストも申されている如く二十年三十年さきの事を年月をきって示すなどということとは人間に出来る次第のものではない。吾等が、神の予言を信ずるといふことは、元来、吾等は大本に出現しました神を信ずるが故にその神示を畏み信ずるのであるが、その予言的中確実なる検証により更に合理的に予言、神の痛切を極め給える世の終末の予言を畏み信ずる

次第である。立替否認者にコーランは示している、

其時アブラハム曰く「主よ此処を平安の地となせ而してアルラーハと末日とを信ずる民のために果実を賜へ」と彼曰く「信ぜざる者は暫く現世を楽しませしめ然る後に之を火獄の刑罰に逐ひやるべし。げに悪き行先なり」(第二牝牛章一二六)

五 天災は人心の反映

天変地異など皆自然現象で、大風大水は温度や気圧の関係などで起るものだ、地震は地すべりや、火山の噴火などで生ずるものだ、科学が教え、人々もそう思い、その事をよく知っている。併しその自然現象なるものは、神々の計いによることで、その計いは人心の善悪、清濁によることであり、人心の反映なのである。人間は靈性が高くなり、豊かになり、みがけてくれば靈光とか、円光とか、光輪とか呼ばれるものを発する。であるから釈迦やキリストの如き偉大なる聖者の画像乃至仏像などは古今東西を問わず所謂光なるものを発せしめている。法

然に東山天皇より授けられたる円光大師という大師号の存する所以でもある。出口聖師の如きは、大正十三年に道院において老祖訓に、尋仁（聖師御道名）の光は既に中下層天国までとどいている。神政成就の後にはその光は無限であるということが示されている。実際たまたま聖師の靈光を拝する人があるが、ただ光明赫赫としてお姿は見えないというのである。所が、人心が悪いと反対に邪気を発するのである。腹をたてると赤黒い気を発し悲観すると灰色の気を発するという。これらはエネルギーであるから消えて了うのではない。その邪気をはらわんがために、神神によって風雨迅雷などで修祓が行われるのである。であるから天災はひっきりやう人災である。人類は深くそこに心をとどめ、反省しなければならぬ。

靈魂物語第十篇言靈解

神界の權威なる、宇宙の大修祓は人間としては不可抗力である。由來天災地妖の如きは、人間の左右し得るものではないと、現代の物質本能主義の学者や、世俗は信じて居るが併しその實際に於ては、天

災地妖と人事とは、極めて密接の關係が有るのである……要するに天災地妖の原因は、天に唾して自己の顔面に被るのと同一である。

大いなる天災地妖ある度に心をいましめ四方の国民大三災小三災の頻発も人の心の反映なりけり

大三災は風火水、小三災は飢病戰である。

道院においては、老祖の訓に、人心が悪いと劫氣を發し、それが天に昇って必ず災厄が起る。であるから神が汝等に禍わいを与えると思つてはいけない。汝等自からまねているのであると示されている。やや最近の壇訓においてもそのことが示されている。

庚子年三、二三、（新曆本年四、一八）濟仏訓

天氣の常を失ふは、厲氣の激盪に由る。災劫の形成は、人心の正を失ふに由る。正常を求めんと欲すれば、須らく大氣を平かにすべし。災劫を化せんと欲すれば、須らく吾心を正すべし。吾心は万化の原を為す。一たび不正有らば氣其の平を失ふ。氣既に平を失はば蒸之が為めに充たず。靈之が為めに清か

らず。神之が為めに凝らず。疾病之に因つて至る。

二云々

と示され、

坐悟（修坐して悟ること）之を明にし、其の所因を知り、其の所由を悟り、其の未だ明かならざるを明かにし、其の未だ化せざるを化す、修養は須臾も離る可からざる也。云々

と長文懇切に説明されている。

更に最近発刊の九月一日号の「東瀛道慈月刊」には同じ濟仏訓が意識されて載せられている。

庚子年五、二三、（新曆本年、六、一六）

濟仏訓

災劫が激しくて、大空にあまねく満ちる際には化よそ世渡人みちびかひとをすくうことは、ますます艱難を感じる。それを何処に感ずるか、天地の大气に感ずるのである。

大气は何以て能く感ずることが出来るのであるか（それは乃ち人類の善氣と悪氣を受けて感ずるのである。善氣を感じれば、天下は静かに平らかに治り

風雨は順調となり、悪氣を感じれば水火刀兵の災劫が続出するのである）人事に在ってはただ氣圧きあつが下がって身体からだ具合が適ことほくないのを感じるのみであつて、厲氣わづらいのきがその中で氣まかにこも 氾ひたうどくるのを見ることが出来ないのである。……即ち厲氣はどうして氣ひたうどく 氾どくであるか。大气はどうして不清にじろのであるか。大气の不清にじろことによって、大气はついに平らかならず、波浪が激はげしくゆたう 盪たうく。それは人欲に影響せられた為である。

二云々

厲氣の發生が更に詳しく示されており「修悟して必ず精純を求め」ることを懇切に誨えられている。濟仏は道院神界の「慈院掌籍」（首長）である。

六 人力では立替え立直し、みろくの世の建設は出来ない

今度の二度目の世の立替え立直しは、人民が何程沢山に寄りて来ても、未代かかりても、昔の神力でないに到底出来はいたさんぞよ。人民の智慧や学で

は成就いたさんぞよ。(大正四、旧八、三〇)

この世の立替え致すには、学でも、恂巧でも、智慧でも、金銀でも、法律でも行かんぞよ。兵隊斗りの力でも行かず、今の政府の行り方でも猶行かず、今の学校の教でも行かず、根本の世の立替えであるから(大正五、旧一一、八)

聖師の「筆のしづ九」

釈迦や孔子が束そくを結むすふて出てみても、此の三千世界の立直しは出来ぬ、人民が智慧学で万古末代かかって、此の世の改造は出来ぬ。此の世を立直す尊い身魂は、竜宮館の地の高天原の神の教である。

宗教が権威を失墜しつつあって、無神論や唯物論が人類の半ばを支配し、世を挙げてわれよしになり、斗争にあけくれしつつある時代に、差当り世間受けのよい、きれいな事をいったり、計ったりしても、それが天業意識の立場より見て、人類救済に果してどれだけの貢献をなし得るものであるうか。天の時を恐れ、神の大愛大憂を畏み、大道を布くの外に人類の救済はなかるべきである。

七 立替え立直しに関する聖訓その他

聖師の「ノアの洪水と方舟」

神の選民となつた人民には、最終の日の来る事は数日前に知らされるなれど、普通人の眼から見れば日は平日の如く輝き、月は万里の波を照し、天気晴朗にして、蒼空一点の雲影を止めず、士農工商は平素の如くに働き、或は永久に天下泰平国土安全、子孫繁栄の夢に酔ひ、十年計画、百年の大計などと企画する際、一天忽ち妖雲を起し、雷電、地震、海嘯到る処に湧起し、親子兄弟の間も救助すること能はずして、悲惨の終末を遂げ、山河草木皆動どうみ、常夜の暗となりし時、木花咲耶姫の神霊現れまして六合初めて清明となり、目出度く天の岩戸が開かれ、至仁至愛の五六七みろくの神政が樹立さるるのである。(大正八、七、一五)日号神霊界誌)

「ノアの洪水と方舟」と題され、ここには挙げないがその中に神秘的な垂示がされてあるのであるが、元來、こ

このみならず前記の如く天変地異、風雨雷電的事象による最後の大掃除が示されている。それでノアの洪水として伝説にある如く、高山の頂きだけが残され世界の山々は水の中につかたて了うのかといった人もあったが、大氣中にそれだけの水分も無く、南北両極の冰山が皆とけて水量が増加してもそんなに水がある筈もなく、神諭にかかる不合理の説示はない。であるからそこまでの心配は無用である。

左に聖師、二代教主の聖歌を掲げる。まことに懇切を極められている。

皇神の現はれまして善悪を 審き給はん時は来れり
天地の神明表に現われまして 善悪正邪を審き玉は
ん

天地も割けんばかりの災を 思ひ浮べて静に神書編
む

未だ世になかりし大なる災厄の 来るを思へば恐し
き神なり

理屈では神代はひらけずあまつ風 ふけばこの世の

やみははるべし

山もとべ海もかへれとときつ風 吹かずばこの世の

暗は晴れまじ

神の世の審判さばに今やあふ坂の 人は知らずに日を送りつつ

立替の経綸の奥は沢あれど人に言はれぬ事も多かり
今までは世人の為に日を延し モウ見赦みゆるしのならぬ
所まで

神人の夢にも知らぬ立替は 生ける昔の神の勲功いさげし
この度の世の立替は万世に 只一度の経綸なりけり
月も日も早迫り来て一時も 貫き刺し成らぬ事とな
りぬる

立替が初り来れば眼も鼻も 口さへ開かぬ事である
なり

立替の大峠までに神の子よ 心入れかえ最早暇なき
今迄の世の持方は終りなり 神世となれば神の行り

方
地は震ひ雷猛り火の雨の ふる事記ことぶを能くも調べよ

天地の雲霧四方に吹き払ふ 科戸の風の神の功勳いさまじ
最後の日は早近づけり既成宗教の 光りの落つる世
こそ寂しき

国魂あらたの神の調査め国々の 身魂またの審判さだまははじまりに
けり

大本をみだす邪神まがらは大本の 内部にひそめる偽信者まよひびと
なる

神がみの怒りたまへる世の中は 万の曲事止むとき
ぞなき

三千年の神の経綸も成りなりぬ 御国の地上に立つ
日は近けん

二代教主

雨の神あれ風地震ゆわ(岩)の神 世に出でたもう
ときわ近めり

世の終り世の始めなりみろくの世 神の仕組も近ず
きにけり

開祖の叫び給いしことごとくが 今足もとにせまり来
るなり

刻々にせまり来る世を如何にせん 皆んなそろひて
神を祈らむ

母夫つまに教えられたることごとくが 今足もとにせまり
くるなり

日に月に迫り来るこそ恐ろしき 終りなる日が胸に
うかびて

いかばかり人の言うとも騒ぐとも 神の御旨のまま
になりゆく

日出磨先生の「神論拝読余録」より

世の立替えの主眼は言ふ迄もなく三千世界の身魂
の審査改善あらためであり、各自の天賦か靈性いし復帰ふくである。

何が大謨たごといつても是程大望なことはない。上下
転倒、軽重変位の今の世の中を篩ふるひ別けて夫れ夫れ
過不足なき天賦の位置に就かしめるといふことが乃
ち世の立替え立直しの眼目である。

勿論過去三千年の昔から今日迄積つた地球上の罪
の塵は物質的にどうしても吹き払ひ、焼き払はなけ
ればならぬ。

「立替えの大峠」「最後の大修被」は蓋し人類の曾て経験せざる想像を超越せる戦慄すべき大惨事たるに相違ない。だから「大峠までに改心をさして、罪障をとりてやりて、楽に越させるやうにしてやりたいと思ふから……」と至仁至愛の大神は声を嗔らして警告を垂れ給うていたのである。

神論の絶対權威を疑ふ人は最早や真の大本信者ではない。……地震雷火の雨が降る事ばかりが世の立替えだと思つてゐると大間違であるといつて立替えという意味は単に精神的方面のみを意味するのであって、物質的の変動は大した事はあるまいなどと考へてゐるが如きはトンデモ無い取違ひである。

「身魂の上り下りで世界は騒しくなるぞよ」という事も「天災が続いて起るぞよ」という事も共に動かすべからざる事実である。

三代教主「私の手帖」より

筆先には大峠のくることを明らかにお示しになっています。筆先に示されてありますことは、みなそ

の通りになつて来るものでありますことはこれまでの歴史が証明しています。ここ五六十年の、思つてもみない世の変わり方を見てもそれはわかります。——といつて、いたずらに心を奪われ、騒いだところで人間にどんなことが出来ましょう。お筆先のお示しは人の心をおどろかすためでもなく狼狽さすものでもないことは分り切つたことで、その一つ一つを心をしずつめていただき、その旨にその心構えと、日々の行いを高めることが大切であります。……

そのお示しに基づき、現在、私たちは何をさしてただけばよいかということ無しにしては折かくのお示しの意義をむなくすることになるでしょう。

三代教主

示されし道はひろらに明らけし　なに今更に迷う人ぞ

吾が祖母の予言たがはぬ世の相を思へば五六七の世は近からむ

あじきなきや昔のままの日の本の国の姿はかげうせ

はてて

さまざまに言葉の林繁るなり 神のみむねを取りな
たがへそ

七 古来よりの予言

立替え立直し、世の終末、神の最後の審判については古来、早くより人類に予言警告がされているのであって殊に偉大なる宗教の聖典と称すべきものには皆、これが宣べられている。

終末的予言については、イスラエル民族からは早くより、多くの予言者を出しているのであるが、キリスト教の旧約聖書には二千七百年ほど前に先ずアモスが出ており続いてホゼア、イザヤ、ダニエル等多く出現しており新約聖書には少なくとも四百十八カ所以上に及んで予言されているということである。マホメット教のコーランにもキリスト教ほど濃厚ではないが、また多くの終末的予言がしてある。仏教にも大集経、法滅尽経等にいくらか其の消息があるのであるが、頗る稀薄であつて、仏教徒

としては、今世の終りが来らんとしていると思ひ到れる人は殆ど無いのではないかと思われる。日本では天理教においてこれが示されており、この頃、この事が相当に宣伝されているということである。その他近時に及んで世界到る所、偽予言者も多いことであろうが、大小の予言者が現われて、世界の危機、終末的予言をしている。

中国の道院においては神文たる壇訓において極めて明白に、懇切に、割切った世の終末が示されている。前記「大道修渡真諦」の訓文の如きもその一つであるが、昭和二十四年台湾道院開設以来、同所において与えられたる訓文だけを挙げて見ても、まことに明白を極め、容易ならざるものを感じしめられる。

台湾道院成立記念刊(書名)己丑年―昭和二四一六、一四
字聖訓

蓋し以て大劫の期に値ふ。大道に頼るに非ずんば、
以て末運を挽きを以て芸芸の衆生をして、水火を出
でて帷席に登らしむるに足らず……良とま以て此の
末劫降世に当り昏迷者は多く、清明者は少なし。昏

迷者は劫数の何たるかを知らず。而して一味造因す
清明者は大劫の以て人類の消滅す可きを知る。必ず
力を竭して化し、以て挽救を期す。所謂道高さ一
尺。魔高さ一丈。之に因りて弭、弭を尽さず。化、
化に勝へず。

これは台湾道院開設劈頭の訓文である。ここにも水火
の難がしめされているが、昏迷者は数運がきわまって、
いよいよやつて来る災劫の何たることを知らない。そし
て「一味造因す」で、悪いことをするものは、同じように
悪いことばかりし、悪因縁を造り重ねる。清明者は大災
厄がおこつて、人類が消滅すべきを知る。であるから必
ず力をつくして、世を安んじ、人類を救済せんとする。
しかし神の道が一尺伸び伝えられんとすれば、悪魔が一
丈の高さでやつて来て妨害する。であるから世を安んず
ることも、人を化し導くことも充分に出来ないと思われ
ている。孚聖は道院神界の「総院掌籍」である。

同記念刊、(巳丑年六、一五)
老祖訓

因果循環、愈生じて愈多し。人と人との間、幾ばく
も三生の因、有らざるは莫し。三世の因、三世の果
此れ災劫の日に積り而して月に重なる所以なり。茲
に下元末造に当り、正に氣運交換の時、過去の一切
因因果果、均しく將さに輪輪転転に随ひ、而して最
後の結束を作さんとする所以なり。惟れ上元開始の
際、両大の間、復た再び如何なる塵濁障翳も存せず
芸芸の衆生をして共に大同を享け、而して其の昇平
を樂ましめんとす。故に下元末造の劫、名けて掃滅
と為す。人群物類、摧殘尤も甚し。天は好生の徳有
るに過ぎず。

「名けて掃滅と為す」とある。人類も物類もくだけ、
いたむことは「尤も甚し」いのであるが、まことに止む
を得ないことで、「天は好生の徳有るに過ぎず」と申さ
れ、神は「餓鬼、畜生、虫けらもつつぼうには落さんぞ
よ」と神諭に仰せられている次第である。大悲大愛の神
は、多年却にわたり苦心慘澹、涙を吞んで、永遠の計の
ために、この大事を決行し給う次第のものであることは

申すまでもない事である。

黙真人訓、庚寅年（昭和二五年）二、一五）

一旦総結の厄運に遭逢すれば、慘痛顛沛、一切の善因宗教、及び素信の神仏に彷彿するも、皆此の難を挽救するに足らず……当に知るべし。浩劫の大、空前の厄運、大善大徳、大修行の有るに非ずんば挽救化解するに足らざるなり。其の次は多く善縁を渡し、多く善霊を聚め、多く善學を充たし、多く善光を発し、衆善衆誠を籍み以て弭化を為す。是れ以て道中の要点なり。各同じく之を修研せよ。

一切の道徳を説いたり、慈善事業を行ったりしている善団に属し、一切の宗教の信奉者でも真実性の乏しい、はつきりしない生活をし、またこれまで信仰された神仏にそういう程度の信仰をささげても、そんな程度の者では皆、此の大難から救い出されるには足りない。「大道に頼るに非ずんば」、これが実行をなさなければ到底皆救われ得ないのであると割切って示されてある。

黙真人訓（同年月日）

科哲、靈玄と相ひ通ずるに至って、而して後、道化自然に普遍す。但し人類全き所亦寥寥たり矣。是れ老祖、諸天聖神と亟亟として救霊を以て主とする所以なり。

現代は物質文明、物質偏重で、精神文化ではなく、宗教はその本質から遠ざかり、教化力が薄弱となっている全体、同じ宗教が幾十派にも分裂しており、而かもその間、深き大なる反目、葛藤があるというが如き事實は教祖の宗教、真髓がどこにあるのかわからなくなっており真精神が失われているということの明らかなる証左であるが、今や新たに正しき偉大なる宗教がおこりつつあるが、その宗教、靈玄と科学哲学が融通するに至って後、大道が行われ、教化が自然に普遍するのである。併しその時には人類の存する所寥寥として減少してしまっているのである。であるから神神は一人でも多く救って残してやりたいと思うから神神は一人でも多く救って残しから先ず救ってやろうとしているとのことである。大本では「神はせけるぞよ」とあり、天理教では「たすけせ

きこむ」とある。

八 改心と祈り

時代は急転し、大国の支配者の一言で世界の状勢は一転を来すほどで、まことに端倪すべからざるものがある。国の内外を問わず、混沌として動揺し、斗争が到る所に展開している。そして偽予言者も多いことであろうが、幾多の予言者が世界中に出て終末的予言をしている。

金星に人類が住んでいるということは筆者は信じ得ていないが、金星人の予言などというものさえ伝えられている。ひっきり、這箇の事実事象は上級霊は勿論、低級霊や、よからぬ霊までも終末的、何ものかをかぎつけ、感知しているからということに帰着すると思われる。要するにこれらを概観すれば、神があの手、この手で人類に警告を発し給えるものと受け取ることが出来ると思う。

世界の残され得る者が三分は四分にも五分になっても多い方が結構でありがたいことであることは前にも申ししたが、二十九億の人類同胞が半分亡びるということにな

っても——神はそんな見込ちがいの宣言はされなかるうが——いかなる重大事をもって来ても問題にはならない次第の重大事である。然らばこれが先覚の士は、これを普く、早く人類に知らせることが何よりも重大、喫緊事であり、それは愛の切実なる流露發動であり、実にその最高最大の義務である。併しもとより人類の危機を叫ぶだけであつては、人類が救われるべきではない。人類をして神の御もとに帰らしめ、神の御光のもとに、神の大道をふましめなければならぬ。一言にしていえば、大道の宣布ということが人類の化渡、救済の根本義である。

所謂「立替え信仰」「時節待ち信仰」と称せられたような、自分だけ助かれればよいとか、立替えというような事変を喜ぶとかいうような、われよしの、非人情、非愛善の精神、態度が不都合であることは申すまでもないことである。その他神諭取違ひの滑稽物語すらも沢山あるが併しそういう間違つた筋合いの者や事実があつたからとか、あるからとかいって、それは立替え立直しの本義には何のかかわりもない。立直しは神の無上命令絶対命法

である。

また、立替えがあるのだから仕事などはしないという
が如きも明かに道をふみはずしているものである。苟く
も道をふまんとするものは、今日、あすの日に何が起こ
うと、生死の境を超えて大道を精進すべきである。

この秋は雨か嵐か知らねども 今日のとつとめに田草
とるなり

二代教主

世をあげて人ははたらけ天地の 木草のことごとくい
そしみており

この神の信心は、腹の底から改心いたして、誠の
たましいにたちかえりてくださらんと、ちつともお
かげはやらんぞよ。(明治三二、二、一日)

此大本は改心々々と一点張りに申す所であるが、

(大正八、四、一三)

神論中には、幾百千箇所、かいしん(改心、改信)と
いう御言葉がくりかえされていることであろう。ひっき
ょう真ことの信仰生活は道を明かにして改心し、改心し

て道をふむことに帰着する。特にこの際は改心の外に救
われる道はない「天国は近づけり、汝等悔ひ改めよ」と
は実に今のときのことである。

人間は道をふむことを心得ていても、道をふみおせ
るということはなかなか容易のことではなく、また道を
ふんでいるつもりでも、道をふみはずしていることも少
なくない。そこで神に祈り祈り、神の御力を頂き、神の
御守護の下に精進しなければならぬ。

風水火の天災地変も信仰の 徳しつもれば安くのが
れん

神を愛し神を信じて朝夕に 魂洗うより外に道なし
天は裂け地は割るるとも大愛の 神にいだかる身魂
は安けし

心をも身をも任せて祈りなば 誠の神は力賜わん
世の終末おわりせまり来りしきわにさえ 神に祈れば生く
る道あり

来たるべきものは必ず来るべし 心みがきて静に待
つべし

二代教主

世に来る大難ことは小難にと 朝夕祈るを神きこしめ

せ

世の終り心をこめて祈るべし 祈るなんじを見すて

給わぬ

神国建設の天業は、救世主を降し、大道を布かしめ、或は十字架を負わしめ、その他大本としては、世界の型鏡の出る所とせられ、有史以来未だ曾て無かった不可思議、重大なる御経綸等多くの重大事項があるのであるが

ここには、神国建設の天業として、それらを一括して「立替え立直し」とし、直接にその御言葉について神諭聖訓等によって申述べた次第である。

なお以上の如く立替え立直しということさえいえば、単に立替えという破壊面だけの理念の表示の如く考えられる向きもあるかも知れないが、この立替え立直しの大事を普く知らしめ、一人でも早く、多く救われるようにするということが建設たる立直しの根本基礎であることを知らなければならぬ。

世界情勢の変貌と立替えの実証

大 国 以 都 雄

大正十年の正月、大本が当時経営していた大阪の梅田にあった大正日日新聞社の各部署の壁に「本年はいよいよ大正十年なり」というポスターがペタペタと貼り出された。年始の祝酒に頬を赤らめた社員一同は、この張紙を見て一様に奇異の念を起し、信者社員に「あれは何の意味だ」と尋ねた。信者社員は「あれは、立替え立直しがいいよ今年だというのだ」と答える。「何っ、立替え立直し、バカなっ」と憤慨するもの、「氣違のようなことを言うな」と怒鳴^{どなま}もの、社内は喧々^{あは}ゴーゴーとしてあちらでもこちらでも口角泡を飛ばして大議論がはじまった。信者外の社員は「不快だ、撤去せよ」と、いきまいて迫る。「迷信だっ」と吐き出すように言って執務も

放棄して飛び出してしもうものもあった。

私達青年記者は、いささか唐突な文字であると思ひ、誰がこんな貼紙をしたか確かめるため、社長秘書に面会を求め、撤去を進言した。すると秘書は威猛高に「何をいう。あれは社長の嚴命だ。いやしくも信者が、あの意味が解らんのか、信仰は何をしている」と一喝して断乎と受けけない。当時の社長は大本の大幹部の浅野和三郎氏であった。

そのうち、大阪市内及び近接市町村に在住する信者が新年の挨拶に打ちつれて来社し、この張紙を見て「いいよだね」といって、如何にも我が意を得たりという顔付きで帰って行く。社内には何かちぐはぐな空気が漂い

気分もバラバラで信者、未信者の間に垣が出来た感がある。青年記者はこれでは新聞もよいものではできぬと一同少年宿舍に集まって協議した。

「立替え立直しが今年だというのは間違いだ」と主張するもの、「いや本年かも判らん」筆先の文字を引用して訴えるもの、「浅野さんが言うような立替えなんてあるものか、取違えだ」と頑強に立替説を否定するもの、議論はまちまちで結局、結論は出なかった。

しかし、この新聞社の騒ぎは忽ち綾部に伝わったとみえ、正月五日、社主の出口大先生が来社されるや、直ちに貼紙は撤去され、あれは間違いだという社主の言葉で騒ぎは一応おさまった。だがこの時、信者外社員に与えた影響は大きく、迷信だ、偏狹な宗教妄想だという非難の言葉が多くなり、ついには一人去り二人去り信者外記者は元の古巣の朝日新聞社へ帰って行った。ところが二月十二日、突然第一次大本事件が起こった。すると「それみる、立替えは大本の内におきたじゃないか」といい出すものがあった。

それまでに、新聞社における信者記者は、どうも立替え立直しの内容を知らなさすぎるといって、浅野派の人々が、夜な夜な信者記者を集めて説教してくれた。いよいよ立替えの時は、富士山が爆発する、鳴戸の渦巻きが変って大阪は水の都となる。世界の各国は土地があがるところと陥没するところができる。また大洋の底から大陸が出現する。大地にガスが充満して生物は全滅する。四月十日四十夜豪雨が降りそそぎ、大地上は水かさが増してノアの洪水のようになる。太陽が出なくなつて暗黒の夜が続く。信仰の無い者は天から降つて来る火に打たれて亡び去る。等々といろいろ立替の模様について説明し、信じないものは身魂が磨けていけないのだと教説された。そしてそれがこの大正十年だといいきった。

だが大正十年は去つて何のこともなく、十一年の正月を迎えた。記者は年頭の賀辞を交換したとき、過ぎ去つた一年を回顧して大きく笑つたものである。

その頃、立替え―天変地異説―を信じていた信者の意気揚々たる姿は次第に衰え、精神界、思想界の立替え説

を称えていたものの意気はあがって来た。

やがて出口瑞月口述の靈界物語が出版されるようになって、天変地異説は煙のようになくなったが、こそこそと個人的対談のさいには、話題になったようである。

私は、そういう過去の立替え立直し説の消長を直接肌身に体験したので、「人民三分になるぞよ」という神示についても、これは精神的に解釈するもの、即ち人間性いや神性を失ったものが多くなり、神性を維持しているものは、かろうじて二分か三分になる世が来ると解釈した。

しかし原水爆の発達、科学兵器の進歩によって、若し対立する二大勢力が全面的に衝突すれば、放射能害によって地上に残留するものは或は三分位になるのも可能だと考え、単に精神的意味にとるのも誤りかなと考え直してみた。ところが科学兵器の発達はいいよ高度になり、今日では、若し両勢力が全面衝突すれば全人類は悉く滅亡して地上に生物はいなくなると知った。すると三分になるぞよの意味は、また考え直さなくてはならない

結果となった。

勿論、太陽が出なくなるの、豪雨が降りつづいて地上が水中に没するなどということは、私の思考能力では否定するよりしかたがない。なまじ私がつけている知識が科学的なもの一禍いしているのかも知れない。何故ならば、それは宇宙に厳然とある不変の法則の停止、物理方則の破滅であり、生物の生存可能の限界外のできごととなるからである。

ある人は、人類が三分(三割ではない)になったら、さぞ淋しい荒涼とした世界になるだろうというものがある私に言わすと、それはまことに甘い想像であって、天変地異によって人類が三分になるまでのことが起きたら、現在の文明は一挙に破滅し、人類生存の可能な地は殆ど失われ、生存を維持する一切のものは無くなるはずだから原始時代よりも更らに深刻な暗黒時代を現出する。たとえ生存し得たとしても人間生活が可能か否か疑わしいそうした後にみるくの世、天国が地上に樹立されるなどとは夢想もできない。神の最終の目的は神の意志によ

る地上天国に在るのだが、そうだった世界に理想の社会を建てるということが可能とは考えられないのである。

その天変地異の時に選ばれて救われた者は幸なりといつて、果して幸であるかどうか考えるだけでも慄然とする

私は、だからそういう天変地異説は信ずるほどの精神構造を持たぬし、思考能力を持たぬものである。文字通りの天変地異を信ずる人の精神能力の優秀者で、そこまで徹底した信念を持たれる人には敬意を表するが、同調するには、あまりにも能力に差があつて、ついて行けないのである。

それより私は、宗教的用語、神的言葉というものは、すべて神の意志信念より発するもので、靈的に、精神的に受け入れるものという深い信念を持っている。そして大本の神の出現は、人類が破滅に陥入るまでになつたから、その破滅を未然にくいとめ、救済のために出現されたものであり、過去の歴史のごとく、世に出ていた神々が世を持ち荒し、思想、宗教、人間的な知識、欲求行動にて、人類が神性を喪失したことを残念に思召されて、

改心を迫られ、新らしく神意に基ずく神業を始められたものと信ずる。そうでなかったら大本神の出現の意義が薄弱になる。救世の神業という眼目が浮び出して来ないのである。ただ天変地異が来るから改心せよと警告、予言されるためのみに現はれたものになりかねない。

立替え立直しが、新らしい将来の世界をめざしての前程としての叫びであるならば、宗教として意義が在るが、単に天変地異の警告、予言では宗教としての意義も稀薄となる。人類の運命について希望のない、未来性のない宗教ならば風のごとく時が去ればそれまでである。天変地異によつて人類に怠業を暗示するものであつてはならない。天地経綸の人としての意欲情熱に水を注ぎ、立替え後のことで、それまでは人としての活動を停止するよきな思想を誘発させるような宗教理念があれば発展はない。「来るべき日を待て」というその来る日は何時のことであろう。一日も怠業を許さぬ人類社会に、そんなことがあつてはならない。

従来いつれの宗教にも末世観はある。終末観はある。

しかしこの末世終末観は、決して永遠にわたり未来を放棄させる消極性のものではない。末世終末を切り替え、新しい創造へ向わしめる希望と情熱を含む積極性のものである。一切の法が亡ぶといつても、宇宙法則や生物の生存原則が亡ぶのではない。過去の歴史、宗教、思想組織制度等が亡んで新しい教説による新しい在り方の出現を含めてのものである。「この世の終り」とは、我々が眼に見る大宇宙が終滅する意味ではない。宇宙法則が停止したり、終滅した後にあるものは一切無であり、神の出現の必要もなければ教説の必要もない。よく人々はバイブルにある太陽が光りを失い、月が輝かなくなり、星が空から落ちるといふ文字そのままを天変地異説に引用するが、太陽が光を失い、月が暗体化し（我々の目から見て）、星が落ちて来たら地球の存在は怪しいことになる。人間の生存などということは不可能である。私はそのような非法的、非科学的の事を信ずるには、あまり非宗教的であるかもしれないが私の知能が承知しないのである。

世界の歴史も大きく変動し、宗教も思想も、社会制度も国家形体も、一切あげて今や新しく推移変革しつつある状態こそ立替え立直しではあるまいか。私はこれこそ大本神の警告予言の実現であつて、みろくの世を想定された世の終りであり世の立替え立直しであると信ずるそこに大本神の要求された改心、改信、改神の意義がくみ取れるのであつて、大本の永遠と普遍性を持つ世界的教説が、人類の魂に迫つて、神性へと復活させるものではないだろうか。何年、何月先になれば、こういうことになるの、大本にこういうことがあれば、それが型になつて世界がどうなるのと、指折り教えて待つ信仰心理は私には無い。待っていてどうなるのかというのが私の信仰である。神の目からすれば微々の微の微々たるものであろうが、みろくの世を一日も早く接近させるために、与えられた力をつくすこと、即ち理想世界を建てるために奉仕することが私の信念であり、大本の信仰だと確信する。

ここで私は、誤解されては困ることわつておく。

それは天変地異が全然無いというのではない。私のいう天変地異は、地球上における自然現象、自然の法則より起り来る天災的なものを意味する。そういうものは否定するものではない。火山も爆発するだろうし、地震も起るだろう。しかしそれは局部的なもので、地球全体が爆発したり、大地一切が震動したり、高山を残すだけの大地が水没したりするような天変地異説をいうのではない。若し地球の何倍、何十倍、何百千倍の星が天から降るといふなら、地球は一たまりもないお陀仏である。私はそんなたいそれた天変を信仰的に待つほどの勇氣も思考力もないことは前にも述べた通りである。だから私の天変地異という意味は、歴史上にかつて人類が体験した程度かそれより多少大きい程度の自然現象をいうのであって、これは別に神様が警告、予言されるほどのものではない。大本の神諭や出口聖師の隨筆、文章の中には、所謂立替え立直しが天変地異として起り来るような暗示的な文字表現のあることは否定できない。だがそがその文章を局部的、断片的に抜萃して見た場合と、全文を通読して

見た場合とでは相当に解釈のしかたが異って来る。このまま世が悪化すれば斯々となる。しかし神が現われて悪の世をちぢめ、切替え、神の贖罪救世の神業に依つて、大難を小難に、小難を無難とするという大愛の御旨がにじみ出ているものが多い。これは愛善の神格から来る当然のものと、その御旨に心から感謝のまことを捧げる。私としても靈界物語が出版されるまでは、先輩諸先生の立替え説に、時に疑問を持ち、時に反感を起しながら或は？と心に暗いかけがさしたこともあった。しかし物語が順次出版されるに及んで、教説、神示は内義的に解釈すべきものと確信を強め、文字通りに解釈することの危険を痛感した。靈界物語は、神諭の真解書であると明確に示されている以上、先ず物語に取組み、物語から得た思想精神を基にして神諭に接すべきだと信ずる。物語を拝読するといろいろの神々の活動、宣伝使の活動の場面に小説的に物語られているので、ついその劇的な事態に引き込まれがちとなりやすい。だが全部を通読して心をとめてみると一脈の思想が一貫して流れている。これが大

事なことと思う。また物語に登場する人物の行動を見ると、時にあまりにも現実離れしている言動がある。言語内容も露骨で、果して、あんなことを発言するものだろうかと疑う場合もある。だがこれは靈界のことで、その人物の意志信念、情動をそのまま文字に表現されるから現実の形式を当てはめることはできない。現実の世界には時間と空間があり、順序が合理的に絶対条件となっている。意志信念、情動の変転の世界には現実の条件は当てはまらない。即ち内的であり、精神的である。私は物語の教訓から、神示とまたは神教は、この内的精神による基本によって解釈すべきであると覚った。その意味で私は「天が地となり、地が天となる」という文章に対しても、現実には我々が仰ぎ観る天が固体化し、固体的地が気体化すと信することはできない。私は日本の旧憲法に「天皇、これを統治す」「天皇は神聖にして侵すべからず」と絶対位置におかれていたのが、新憲法によって臣民であった人民が、不忠、不義、反逆者の汚名も着ずに主権者となったこと、これは天と地がひっくり返った

ような変革であって、天が地となり地が天となったと観て差支へない解釈だと思う。世界の思想においても、支配階級、特権階級が被支配階級に位置を顛倒している世界情勢を見て、天と地がひっくり返ったと神示の適中に驚いている。けもないうちから警告予言されたそのものが現実に実現したものと、その権威と神言の確乎たることに、信仰信念を強くする。「東京はススキ野になる」とあるが、まさに今日は精神的にバックボーンを失い、風こそよぐススキ野の状態である。

私はここに何年何月の神示にこうある。何年の文章にこうあると一々列記して、その解釈をこころみようとはしない。しかし私の言いたいのは、天変地異による一大変動によって人民三分以下に減滅しなかつたならば立替え立直しは成就しないし、それが神の絶対的経綸であるという決定的関門であって、それなくては待望のみろくの世などはありませんとする思想信仰には抵抗を感じる若し仮りに、汝は何年、何月には天の火に打たれて死滅は決定していると宣告されたら、社会的活動も、人間的道

義も一切放棄して、本能欲求をむさほり自棄的にその日を待つことになるであろう。それでは宗教としても、建設的活動的人材を育成教化することにはならない。大本の神を信する者は助かり信ぜないものは悉く亡ぶのだという思いがあった、排他的、独善思想が神の意志に叶うものとは思わぬ。愛善の神はそんな利己的なわれよしの神とは断じて思わぬ。虫けらまでも救うぞよとある神言こそ、神の御心であり、それあるための救済の神業だと確信する。

現在の世は、物語に示されているごとく、「思想の洪水氾濫」の時代である。これをとり違えて、現実に大豪雨によるか、氷山の溶解によるか、海水が何かの現象で増大して大地に氾濫して来ると考えるのは、自然法則より考えて納得がゆかない。しかも高山の頂きを残すだけに水が氾濫するとすれば、人民三分は確保できぬ。頂山に登りついても食糧がなく生存が不可能である。

私は立替立直は現実の世界に急速度に行われていると思う。人類の生存記録である世界の歴史は、近世より現

代にかけて、めまぐるしい程の速度をもって変転していると見ている。哲学も宗教も、思想も、政治も経済も社会制度組織まで加速度的に、いまだ人類が体験しなかつた新しい在りかたへと発展進行しておると解釈する。過去の社会の道義規準は破壊され、個人も家庭も精神規準を失ってしまった。過去において權威と信じられていたものはその權威を落し、自由、平等、解放の思想は神のごとき威力をもって世界を洗い替えている。立体的構成によつていた歴史は、平面化されて来た。「榘マサかけ引きならず」神示の実現というものか。「一たんは天地に引きあげになるぞよ」と宣言されたごとく一切の權威と価値の顛倒何もかも骨ぬき、行きつまり、これらは引きあげられた後の残骸にすぎないためであると解釈して誤りであろうか。そしてそれは「世界を一つに丸めて治めるぞよ」の建設へ向う過程であつて、これこそ通らねばならぬ道だと確信している。

「人民は可愛そうなぞよ」の御旨によつて、或は因襲から解放し、古い慣習道徳から解放し、特權、支配から

の圧力から解放し、神の子として同等のレベルに引きあげられた現在の人民の生命は高く評価されることになった。これは神の公平無私な愛の発露の賜であり感謝してあまりある。格子無き牢獄時代は去ったといえる。立替え立直しは実に、世界の人民が神から与えられた元の昔の「人」としての位置に復活させられる有難い仕組であったのだ。世界の歴史的に蓄積された一切の罪悪、（罪悪といっても個人的なものではない）思想、宗教、政治経済が思想の洪水によって大洗濯、大掃除されて、新しいみろくの世へ移行する状態を高見の見物が出来る信仰に在ることをよろこんでいる。

立替え立直し——天変地異——説に対し、私の見解を表明した。汝は大きな取違いをしていると叱責されるを覚

悟の上である。しかし私は信仰は自由であると信ずる。心にとれる神示に対し、その解釈も心に自由であつてよい。こうだと決定ずけて人に、その信仰に同調せよと迫るのは独裁専制者ならいざ知らず道義的にむしろ罪悪である。私はそういう強圧的なものには、道理があつても反抗を感ずる。私は、左様な天変地異のイメージを抱いている信仰が幸せな信仰であるとは思考できない。何年何月を待ちつつ恐ろしいイメージにエネルギーを燃焼するより、恐怖のない天国を夢見つつ、神の大愛に抱かれていたという信仰的安静な心境に日夜を感謝したいと思つてゐる。そして、今も尙、大正十年立替説に関する先輩諸先生の信仰の浮沈を回顧して、反省をしているものである。

大本の基本思想

“立替え立直し”について

桜井八洲雄

はしがき

大本の発祥は關祖出口なお子刀自が明治二十五年（一八九二年）旧正月、京都府綾部町に於て、三千世界の立替え立直しとみろく、神世の実現を啓示されたのに始まるのであって、立替え立直しとみろく、神世の実現とは、大本の基本思想であり、これをヌキにしては、大本の出現の意義も使命も考えられないのである。

しかし、“立替え立直し”の意義については開教以來今日まで六十余年、時代によっていろいろな解釈が行なわれて来た。

現教主が三代教主として起られた時に、詠まれた歌の

一つに

示されし道はひろらに明らけし

何今さらに迷ふ人らぞ

というのがある。開祖、聖師、二代教主によって教えられることはことごとく教えられ、説かれることはことごとく説かれてあるのに、半世紀以上を経た今日、大本の基本思想について統一した解釈がついていないとするならば、おかしなことである、といわねばならない。末梢の点においては、主觀的にいろいろ異るところがあつても仕方がないと思うのであるが、基本思想においては少なくとも教団において統一した見解のもとに進むのになければ、真の力も發揮されないのであろうし、またその使

命も果すことはできるものではない。

一方には、平和運動や世界連邦運動に力を入れるべきであると主張して運動しているかと思えば、他方にはそうした運動は立替えを否認する虚しい運動であると主張したりしていたのでは、全く分裂症である。

何故そうしたことになるかという根本の原因は、大本の基本思想たる「立替え立直し」の解釈如何、受けとり方如何によって非常な差異が生じてくるからである。以下この基本思想について所信を述べて見たいと思う。

一、神論の真解者と真解書

開祖の「筆先」は、すべて平かな文字のやさしい文章で書かれてあるが、その真の意味をつかむことはなかなか容易でない。

開祖の靈感によって書かれたままの筆先といい、これを出口聖師が取捨選択して発表されたものが神論であるが、神論はちょうど鏡のようなもので読む人の心々に受けとれるのである。自分の姿が鏡にうつるようなもの

である。その真解釈になると、むづかしいというよりは不可能といった方が適当かも知れない。それで神論には次のように示されている。

「出口に實際じやうまっを書かすから、それを上田海潮（出口聖師）が写して細しやうまっこう説いて聞かす御役なり」（明治三十三年閏八月一日）

「出口は将来きあの事知らず役、海潮（出口聖師）はそれを説いて聴かせて、世界を改心させる役じゃぞよ」（明治三十三年閏八月十一日）

これによっても明かなように、神論の真解者は出口聖師であるということになっている。

その真解書は、「靈界物語」（全八十一巻）であるがその第十二巻の序文に説示されているように、筆先は「一言一句と雖もその言語の出所と時と位置とを靈眼を開いて洞察せなくては其真相は判るものではありませぬ」とあるので、みだりに独断的解釈を下すのは真理を傷つけ破ることになるのである。「靈界物語」第四十八巻の第一章「聖言」には、「その聖言」の裡には何れも皆内義な

るものを含んでいる。而して天界に在る天人はこの内義を知悉するには靈的及天的意義を以てするが故に直に其

神意を了解し得れども、人間は何事も自然的科学的意義に従って、其聖言を解釈せんとするが故に、懷疑心を増すばかりで到底満足な解決はつけ得ないのである。ここに於てか大神は、天界即ち現幽一致の目的を達成し、神人和合の境に立到らしめんとして、瑞靈を世に降し、直接の予言者が伝達したる聖言を詳細に解説せしめ、現界人を教へ導かんとなし玉うたのである」と示されている。故にわれわれは出来るだけ謙虚な心持を持って、聖師の解説に従って真意をさとらしていただくことが大切である

しかも筆先は神劇の脚本に比すべきもので、「教祖の筆先の断片的（台詞書）のみにては、到底神界の御経論と御意志は判るものではない」と示されてあるので、いろいろな俳優各自のセリフ書きを集めて一つの芝居に仕組んだ全脚本ともいふべき「靈界物語」を通さなくては、とうていわかるものではない。それで或る時期までは、出口聖師が緯の神論を執筆して、これを補足され、大正

十年秋よりいよいよ「靈界物語」を口述発表して、神論の密意を開示されることになったのである。

二、開教当時より今日までの世の推移

「立替え立直し」という言葉は普通建築に用いられる言葉で、家を立替えるとか立直すとかいわれ、政治界経済界の立直しというような意味にも使われるので、「改造」という意味である。立替えは破壊であり、立直しは建設であるというように解釈も出来るし、神論の中には「立替え」だけで「立直し」を含めた意味に用いられているところもたくさんある。しかし大本でいう「立替え立直し」は一さいの大革新であって、「あとにもさきにも、末代に一どよりない大もうな、靈魂界と現世界との大立替え」であるというのである。言葉をかえていえばこれまでは宇宙は未完成の時代であったが、今度は目鼻のつく完成時代になるということである。もちろん宇宙は不断の創造的進化を遂げているのであるが、空前の大整理が行なわれるのである。

宇宙は創造以来、順序に従って生成化育している。一日にしても、朝、昼、夕、夜という順序を経、一年にしても、春、夏、秋、冬の順序を経て移り変わる。例えば、季節の移り変りにしても、夏から秋へ変るときなどは実に微妙である。

三代教主は世の移り変りを季節に譬えておられるが、また大本開祖聖誕百二十年大祭における御挨拶の中でこのように述べておられるのである。

「お筆先に示されております「世が変わる」ということにつきましても、明治廿五年から今日までの、国内や、世界のうつりかわりを見ますとき、或る時期はゆるやかに、或る時期は急激な動きがみられますが、それが積み重なって、六十年あまりのうちに驚くほどの大きな変りかたを示しております。時勢の流れの、ゆるやかなときも、激しく思われるときも、ともに神さまのお仕組のままたまに、ミロクの世へ一步步々近づいてゆく、世のごときであると私は思います。

最近世界の出来ごとから、何か大変な世の変り目が来

たかのように考える人があろうですが、神さまが「世が変わりミロクの世が来る」と申されますのは、せせらぎの水が時にははげしく岩をかみ、時にゆるやかに平野を流れながら、ついには大海にそそがれてゆきまますように神さまのみ力と、人のまことの努力とで、世界は次第にミロクの世へ近づいてゆくもので、戦争や天災だけで、世が変わってしまうようなものではないと思います。

世のうつり変りを見ますとき、筆先に示された神さまのお言葉に少しの違いもないことを感じますとともに、水の流れの一部分のみをみて、さわぐことなく、その流れの中に生きながら、ミロクの世の実現のために御用さしていただくとする私たちは、常に足もとをかえりみなければならぬと思います。

開祖さま時代には、朝々顔を洗いますにも、必要以上に水を使ふようなことはなく、水一滴粗末にしない、天地の御恩に感謝する生活や、はきもののぬぎ方一つ乱れない教の実践が行きわたっていました。

また世界の大難を小難にと、寒中でも日夜に水行をつ

づけられ、ひたすら世の平安を御祈念されました開祖さまの御精神が、信徒の一人々々の胸に宿されていました。初心にかえれとは、誰もが口では申しますが、実行はなかなかむづかしいものです。

開祖さま御聖誕百廿年祭を迎えまして、開祖さまの御苦勞をしのびますとともに、開祖さまの時代をかえりみその御精神を忘れないで、世のよき鏡としての大本になりますよう、皆様とともにがんばりゆきたいとおもいます」

「立替え立直し」ということをこうした譬えで教主が示されているお言葉はこれを開祖の神諭や靈界物語などと対比して、少しの矛盾もなく、現代の「筆先」として受けとらしていただくべきであると思うのである。

ただ「立替え」の意義を神諭（大正六、旧九、五）に「戦争と天災とが初まりたら、人民三分に減ると、初発の筆先に書いてあるなれど、ここになると、世界に残る人民が二分位より無いぞよ」と示されてあるので、「戦争と天災による最後の審判」と解し、その最後の審判に

よって「改心の出来ぬものは悉く滅されて、世界の人民は三分になる」とし、そうした「立替え」が行なわれないう限り、ミロクの世界は実現するものではない、と信じている人々にとっては、この教主のお示しは何か物足りなさを感じるかも知れない。

三、神示は宿命的か警告か

「世界の人民三分になるぞよ」——この神諭のみ言葉は人間の感情に強く響くみ言葉で、しばしばこれまで問題になったものである。三分というのは三割ということではなく、百人に三人ということであるというから、これを文字通りに解釈して、神示は宿命的であるとするならば、世界の人類二十九億として、その「三分」は八千七百万人しか残らないということであり、日本の人口を一億として、その「二分」とは、二百万人しか残らないということであり、日本の人口は大阪市の人口に足らぬもので、それらの人々が全世界あるいは全日本に散在するということになるのである。

こうなると、神諭（明治三十六年三月三日）に示されているみ言葉を想いおこす。

「このひらけたせかいをつぶしていたせば、じんみんなも二三ぶになりてしまふから、せかいで二三ぶともうすと、あちらにひとり、こちらにひとりのころといふようは、ひどいことになるから、このせかいをこしらへるには、なみやたいていででたせかいでないから、ひともちつとなりとへらさんよう、せかいもつぶさんようにいたしたいので、いちねんのぼしそのまには、ちつとかいしんがでけようかとおもふて、のぼしのぼしいたしたなれどおほがみさまからはたびたびのごさいそく、もうおわびいたそうもいたされんことになりて、おほがみさまがちにおりなされて、ごしゆごなさることは、ふでさきにだしてあるが、このおほもとのなかにおりなされて、ごしゆごあそばすじせつがまゐりてきてをるぞよ。こんなけつこうな、ちにたかあまはらがでけるよがまゐりてをるのぞぞよ」

世界の人民が二三分しか残らないということは世界が

つぶれるということである。

これに反して、「世界の人民三分になるぞよ」——このみ言葉を神の大愛から発せられた「警告」として受けとるならば、文字通りに解釈しては誤りになる。

「分かりた人から改信して下さらんと、世界の人民三分になるぞよ」（明治二十九）

「世の立替えであるから、人民三分になるとまで行くのであれども、大難を小難にまつりかえて、人民を助けるのであるぞよ」（明治三十、八、二九）

以上の神諭によれば、「改信して下さらんと」とあるので、改信さえしたら、三分になるという意味ではない。また次の神諭によれば、本来なら「人民三分になるとこれまで行くのであれども、大難を小難にして「人民を助けろ」というのである。それで神諭のみ言葉を宿命的に受けとるか、「警告」として受けとるか、によって大きな相違を生じてくる。

「靈界物語」第一巻「発端」には、このように示されている。

「神論にいわく、

「三十年で身魂の立替え立直しをいたすぞよ」

と。変性男子の三十年の神業成就は、大正十一年の正月元旦である。変性女子の三十年の神業成就は大正十七年二月九日である。神論に、『身魂の立替え立直し』とあるを、よく考えてみると、主として水洗礼の霊体両系の改造が三十年であつて、これはヨハネの奉仕すべき神業であり、体霊洗礼の霊魂的改造が前後三十年を要するといふ神示である。しかしながら三十年と神示されたのは大要を示されたもので、決して確定的のものではない。伸縮遅速は、到底まぬがれないと思う。要するに神界の御方針は一定不変であつても、天地経綸の司宰たるべき奉仕者の身魂の研不研の結果によって変更されるのはやむを得ないのである。

神論に「天地の元の先祖の神の心が真実にわかりたものが少しありたら、立替え立直しは立派に出来上るなれど、神界の誠が解りた人民がないから、神はいつまでも世に出ることが出来ぬから、早く改心して下されよ。云

々」

神と人との関係は「無限」「絶対」と「有限」「相對」との関係であり大本では、神は万物普遍の靈にして人は天地経綸の主体なり。神人合一して茲に無限の権力を發揮す」と示されているので、これまでの宗教で教えられているよりは「人」に重点がおかれているのである。換言すれば、人間は現界における神（頭の顕界の神）であるといふ思想が在るのである。「三鏡」の中に、神の経綸」として出口聖師はこう教示されている。

「神は全大宇宙を創造し、宇宙一さいの花とし実として人間をつくつた。人間は神の精靈を宿し、神にかわつて地上の世界はいうもさらなり、宇宙一さい靈界までも支配せしむることとしたのである。しかるに人間は、現界に生まるゝ刹那の苦しみによって一切の使命を忘却したた地上のみの経綸者として生まれて来たもののように思っているくらいは上等の部分である。世人の多くは、人は何処より来り、いずこへ去るといふ点さえも明かにわかつていない。

大極といい、自然といい、大自然といい、上帝または天帝といい、阿弥陀と称え、ゴッドというも、みな無始無終、無限絶対の普通の靈力体を指したものである。ゆえに、神とか大自然とかいうものは、宗教家のいうごとく絶対的の全智全能者ではない。地上の花たる人間を疎外しては、神の全智全能もあつたものではない。けれども、神は全智全能なるがゆえに人間を地上に下して、天地経綸の用をなさしめている。神と人と相俟って、はじめて全智全能の威力が発揚されるのである。

数百万年の太古より、因蘊化醇されたる今日の宇宙も人間というものを地上に下し、これに靈と力をあたえて各々その任をまっとうせしめたから、今日のやや完全なる宇宙が構成されたのである。神は山川草木を或る力によりて造り出したが、しかしながら人間の活動が加わらなかつたならば、依然として山河草木は太初はじめのままで、すこしも進歩発達はしていないのである。自然に生えた山野の草木、果実はきわめて小さく、きわめて味が悪い瑞穂の国の稲穂といえども、太初地上に発生したものは

わずか三粒か十粒の粃もみをいただいていたのに過ぎない。それを人間がいろいろと工夫して、今日のごとき立派な稲穂を作り出すようになったのである。そのほか一切万事みな人間の力の加わっていないものはない。しかしながら人間は独力では働かできない。いずれも神の分靈分魂が体内に宿って、地上の世界を今日の状態まで開発させたのである。人間は神と共に働いて、天国をつくり浄土もつくり、文明の世もつくるのである。この原理をわすれて、ただ神仏さえ信仰すれば全智全能の神だから信仰さえとどけばどんなことでも神が聞いてくれるように思うのは迷信妄信の甚だしきものである。「云々」これによって見るも、人間の努力がきわめて大切であることがわかる。

神は全智全能で、一さいを見透しておられるから、人間のあらゆる努力を勘定に入れて、しかる後に「世界の人民三分になるぞよ」といわれたのである——本当は「泥海になるところを三分になる」のである——こういうふうに解するならば「改心して下さらんと、世界の人民三

分になるぞよ」は明かに矛盾したお言葉である。神諭に「神ありての人民、人民ありての神であるから、このありがたい因縁（と）がわかりて来たら世の中はよくなるぞよ」と示されているように、神界の御方針は一定不変であっても、天地経綸の主体たる奉仕者の「身魂の研不研」活動の如何によって現実界に現れる結果は非常な差異を生じてくることになるのである。さもないと宿命的思想に墮して、宗教は阿片的存在であるといわれても致し方がないであろう。大難は小難に、小難はこのままに——という祈りが、そのまま実践となつてゆくのが本当で、「世界の人民三分になるぞよ」はあくまでも「警告」として受けとらしていただくべきである。大難は小難に小難はこのままに——ということ、例えば殺し合いのケンカのところは、なぐり合いですまし、なぐり合いのケンカのところは口ゲンカですまし、口ゲンカのところはそのままなしますますようにしていただきたいということである。畜類、虫けら、餓鬼までも救いたい、というのが天地の元の祖神の心である。

それ故、俳優のセリフ書きの一部分をとらえて、これが絶対であるかのごとく主張することは、とんだ誤りを生ずるので、筆先全体に流れている「神の御心」をさとらしていただくべきである。こういっても、戦争や天災は絶対にならない、と否定する意味ではなく、救済を主として宣教せらるべきもので、「神示」にこうあるからといって、そのまま独断的解釈を下すことは如何に純真な人々をあやまらせるか知れないのである。宣教する場合の自己の意志想念と表現とは細心の注意を払わなければならぬ。

四、予言だけでは救われない

明治三十七年の四月には、この世の滅亡が来るというので、キリスト教信徒がヒマラヤの高地を尋ねて寄り集い、寺を建てたり祈禱して、すべてのことをうちすてて救いを祈ったことがあるという。本年の去る七月十七日の「夕刊読売」によれば、七月十四日パリ祭の行なわれた日に、アルプス最高峰モン・ブランのイタリヤ側山麓

ではえらい騒ぎがもちあがった。それは「同日、正確な時間をいえば、午後一時四十五分原子戦争が突発し、一時間の核爆発が続いたのち、大地震と津波がおこって世界の終わりがやってくる」といった話がそもそものはじまり、なんでもイタリヤの新興宗教の教主の「お告げ」で、核爆発と大地震で地軸は四十五度に傾いてしまい地球上でモン・ブランとヒマラヤ以外はすべて洪水におそわれることになるはずだったというのである。

まず欧州各地に住む百人ばかりの信者は教主のあとにしたがい、二週間分の食糧、それに十二隻のノアの箱船ならぬボートまでモン・ブランにもち込んだ。さらに十三日になるとパリの信者から教主に手紙がとどき、〃五百五十七人の避難団体が発出したから山小屋の手配をたのむ〃とってきたそうだ。その内訳はフランス人百五十一人、イギリス人百八人、オランダ人五十人、ロシア人四十四人、ポーランド人百五人、中国人九十九人で、九台のトラック、三台のブルトナー、二十二台のジープなどに分乗するといった大掛かりなものであったが、

この二十世紀の〃ノア族〃の大行列はついに姿をあらわさなかったということだ。

しかし、二週間の間はこの騒ぎでもちきりイタリヤの新聞社には読者から「気違いどもを山から連れもどせ」と投書が殺到したが一向にさわぎはおさまりそうになかった。ついに一人の青年は、〃神のお告げ〃ですっかりノイローゼになり、二昼夜、山野をさまよったあげく、「世界の破滅を待つより、自殺した方がましだ」と遺書を残し、自宅で首をくくってしまったという。

またアメリカのアリゾナ州のベンソンという小さな町でも、神のお告げによってソ連の水爆攻撃があると信じこんだ人たちが、地下防空ゴウに避難しているのが発見された。このうちの一軒では地下三層のところコンクリート・ブロックの防空ゴウをつくり、夫妻と五人の子供、それに近所の人たち十五人がはいていた。ところが避難に備えて大量の食糧品を買い込み貯蔵したものの一万千七百ドルの代金支払いを不渡り小切手でやったため訴えられて明るみに出たものだ。このほかにも百人は

どの信者が同様な防空ゴウに避難していたということだ
かりに世界最後の日が来て、何時世界がつぶれるかな
どということが、神示の名のもとに発表されるとしたら
おそらく世界到るところでこうした事件がもち上がるで
あろう。人類は予言では決して救われぬであろう。世
界最後の日が××年×月×日に来るなどということがわ
かったなら、人間はマジメに働くことはできるものでは
ない。

この秋は雨か嵐か知らねども

今日のつとめに田草とるなり

こうした歌の態度で生活せよ、といったところで、貪
嗔、痴にあてられた人間に対しては、ただ害毒を与える
だけで、真の「救い」にはならない。そうした思想は一
種の破産思想である。家を新築したいけれども、近く「
立替え」が来るなら止めておこう。新しい事業を計画し
ているのだが、近い中に世界がつぶれてしまうならもう
中止しよう。——こういうことになってしまう。また狡
猾な者は、今の中に材木を買い占めて一ト儲けしような

どということになるにきまっているのである。それで、
神論には、「この仕組がわかったならよい金儲けができ
ると申して、肝腎の神の経綸しんごんをワヤに致すぞよ」という
意味のことが示されている。神論には、「後からわかる
仕組」とも示されているゆえんである。正しい目的のた
めには、それに相応した手段がなければならぬ。目的
は意志（愛）であり、手段は智である。

五、神の警告と世界の大勢

それでは「世界の人民三分になるぞよ」という神の警
告は、現代どういう形をとって現われているかといえ
ば原水爆禁止運動、世界連邦運動その他あらゆる心ある人
々が、もはやイデオロギー、国籍、宗教、信条などすべ
ての差別を乗り越えて、人類が人類という種族の一員と
して、この世界の危機を切り抜けねばならない。そのた
めには戦争そのものを、なくすために世界全体が一つに
なっていく他はない。——こうした大勢になり、初めは
科学者は科学のための科学という態度をとり、あるいは

第二次大戦中のように自分の国の平和を守るといふ形で戦争に協力して来た科学者たちが今や人類の直面している危機の実態を人類全体に知らせて、全人類を救うために立ち上がらねばならないと考えるようになって来た。

特に世界の首脳者―例えばフルシチョフ首相のごときは昨年末、国連総会に於て四年以内に世界の軍備を撤廃せよと提案した。そこで今こそ大本としては宗教家はもちろん、教育家も政治家も科学者も芸術家も、あらゆる階層の指導者は人類の危機の実態を全人類に知らしめてその救済にあたるよう努力すべきである。

「この世は神国、世界を一つに丸めるぞよ、そこへなるまでには、なかなか骨が折れるなれど、三千年あまりの仕組であるから、上に立ちておれる守護神に、チツトわかりかけたら、神が力をつけるから、もう大丈夫であるぞよ」(明治二五、旧正)

今こそ、この神論のように、〃上にたちておれる守護神〃即ち為政者指導階級が起ち上がって、人類救済にむかって協力するよう、大本は全力を尽すのでなければ、

大本出現の意義も使命も、いづこにありやといいたいのである。

大本の基本思想たる〃立替え立直し〃の意義の理解の仕方如何は、われわれの個人の生活ばかりでなく、教団の大方針、神業の進展に重大な影響を与えるものであるから、十分に検討して全大本信徒は和合一致、その本来の使命にむかって邁進してゆかねばならない。

「日本の人民から改信をして下さらんと、世界の人民三分になるぞよ」という神示は「大本人から改信して下さらぬと、世界の人民三分になるぞよ」という意味において、「此中の立替えを早く致して、助ける道をこしらへておかねばならん」ということであり、「この大本の中から改心を致して、世界の人民の助かるようの事を致さんと、誠の道にはならん」ということである。大本人は大本の中、綾部、亀岡の本部をはじめ、全教団をかえりみて、果して「これでよいのか」ということを深く反省してみなければならぬ。

大本の基本思想は「立替え立直し」と「みろくの神世実現」である。ここに必要と思われる事項を左に列挙しておく。

一、神論は自分勝手に解釈しないで、真解者たる出口聖師の「靈界物語」の説示に従って解釈すべきである。

二、神論に示されてあることは、芝居の断片的セリフ書きのようなものであるから、その一部分をとって解釈しようとしてもムリであり、また誤られることがある。神論全体に流れている神意を受けとらしていただくべきである。

三、神論には文字的意義と内的（靈的）意義とがある。それで文字通りに解してよい場合と内的意義によらねばならぬ場合とある。内的意義は真理で、文字的意義は真理の外観のようなものである。

四、キリストの本当の教が伝わらぬようになった時、仏法に於ては釈迦の誠の教が伝わらないようになった時

それが世の終りである。即ちキリスト精神の滅亡、仏法精神の滅亡を意味する。この時にあたって、本当の耶蘇教、誠の仏法を起すのが世の立替えである。（水鏡―世の終末と立替え参照）
スエーデンボルグは「世の終りとは教会の終り、最後の時である」といつている。

五、キリストは、最後の審判をなすために再臨するといつたが、彼の最後の審判というのは、火の洗礼をほどこすことの良いである。彼は火の洗礼をほどこさんとして、その偉業が中途にして挫折したため、ふたたび降って火の洗礼を完成せんと欲したのである。

火の洗礼とは、人間を靈的に救済することであるといふことは、すでに述べたところである。最後の審判は、閻魔大王が罪人を審くと同様なる形式において行なわれると考えている人が多いのだが、それは違ふ天国に入り得るものと、地獄に陥落するものとの標準を示されることである。この標準を示されてのち、各自はその自由意志によって、自らえらんで天国に入り

あるいは自らすすんで地獄におつる、それは各自の意志想念の如何によるのである。

標準とは何か、靈界物語によって示されつつある神示そのものである。ゆえに最後の審判は、大正十年よりすでに開かれていたのである。(三鏡—靈界物語は最後の審判書参照)

六、現代はもとも悪い時代だと思つているものがあるが、そうではないのである。こころみに明治維新前の状態をみよ。生殺与奪の権は三百諸侯の手ににぎられ、^{ざん}讓するものあらば、事実の有無をとわず、ただちに手打ちにするようなことも少なくなかつた。

現行法律には不備の点がないとはいえないが、ともかくも三審制度をとつて、しらべた上にも調べてもらうことが出来るのは、如何にありがたいことか分らぬのである。山賊や雲助輩が横行して、わずかな旅行にも命がけで出かけなければならなかつたその頃にくらべ、警察制度の行きとどきたる現代はどんなに幸福であるか、これもまた比較にならない、わらじ脚絆に身

をかため、箱根の山くらいを天下の嶮として行きなやんだ当時にくらべて、汽車中に安坐して、五十三次をも夢の間に乗り越すことの出来ることを思えば、まったく隔世の感があるではないか。その他、衣食住のそれぞれがみな非常なる進歩をして、天国の相をそなえつつあるのは結構なことである。これまったく明治大聖帝の御恩徳によるもので、世相は明治維新を一転期として天国化しつつあるのである。

殺人強盜などの記事が新聞紙上にひんばんに現われるを見て、現今の世の中が一ばん地獄相をあらわしているとするものがあるけれども、それは誤りで、むしろは通信報道の機関が不完全で、驚くべき種々の出来事も報道せられなかつたのである。辻斬などが方々にあつて、人間の首があちこちころがっておることなど、珍らしくなかつたのである。神論に、いまが末法の一ばん悪い世であると仰せられてあるのは、人心のゆるまないように教えられた言葉である。(三鏡—天国と現代参照)

七、二代教主は「まっぼうのよのをわりなりみろくのよ」という短冊を書いて信者にわたされた。時代は明治時代よりミロクの世となっているのであり、開祖は明治三十年より「法身のみろく」とし顕現され、昭和三年三月三月より出口聖師は「応身のみろく」として本格的の御活動が始まったのであり、現教主は「報身のみろく」としての神業を遂行し「立派な神代を建る御役」を果されつつあるのである。

八、神論にも「人は心の持ちよう一つで、その日からどんな苦しいことでも喜び勇んで暮される」と示されたのは、実に至言であると思う。一点の心燈くらければ天地万有一さい暗く、心天あきらけく真如の日月かがやくときは、宇宙万有一さい清明である。吾人は平素心天の光明に照らされ、行くとして歌あらざるはない吾人の心魂神恩を謳うとき、万物みな謳い、あたかも天国浄土の思いにたのしむ」（霊界物語、第二巻第二十二章嵐の跡参照）

九、大本の立替え立直しは霊魂界と現世界のもので、霊

と体、精神と形式—この二つが改善されねばならない
一〇、根本は人間性の改変、人間改造である。何故かといえは、政治も法律も経済も教育も科学も実業も、一さい行なうのは人間だからである。

一一、「いよいよ天地人三才の完成する間際であり、いまや新時代が生まれんとする生の苦悶時代である。今日までいろいろの大宗教育家や聖人や学者などがあらわれて宗教を説いたり、宇宙の真理を説いているが、いずれも暗中模索的の議論であって、一つとしてその真相をつかんだものはない。ゆえに今日まで真の宗教もなく、真の哲学もなく、真の政治もおこなわれていないいよいよ宇宙一切の完成の時期になったのであるからその過渡時代に住する人間の目からは、地上一切のものが破壊され滅亡するように見えるのである。（三鏡

—神の経綸参照）

開教七十周年を二年後に迎える今日、大本は開眼して、最も重要な報身みろくの神業の現段階に処せねばならないと信ずるものである。（おわり）

「大本の天業使命」の 問題点について

土井氏の書翰にこたえて

佐々木のぼる

一、前文によせて

過日、たまたま土井氏著「大本の天業使命」を拝見する機会に恵まれましたので、その問題点によせて立替える立直しに関する私の見解をいささか小文にまとめて、私
が深く尊敬している恩人に見て頂きました。ところが、その小文がはからずも深い因縁に恵まれて、土井氏の御目にもふれることになり、更に有難いことには氏はその御多忙にも拘らずわざわざ貴重な時間をさかれて、問題点の焦点ともいうべき「三分説」に関する『神諭』に対し

ての氏の受取り方を、更に詳細に補足説明された長文の書翰をまとめて、私の許に送ってよこされました。

それはいうまでもなく、人類の救済存亡に関する「立替立直し」の重大さを真に身をもって切実に痛感し、人類救済の道（真意義）を深く想うところの烈々たる宗教的信念に満ち溢れたものであって、この書翰の経緯いきさつ一つをもってしても、氏の宗教的情熱、引いてはよってきたる『大本』の霊的大精神の偉大さを容易に偲ばすものがあって、私は尙々深く打たれたものであります。そして何よりもこの「誠」（霊的眞実）こそが大本発展の礎と

なっているものであり、引いては神の立替え立直しに發展的に能動する基本的な支えであることを深く想って、いい知れぬ喜びと強みを感じると共に、人類救済の靈的^{かなた}要たるべき『大本』の意義と役割（あり方）を、もっとも真実にして（惟神の道）、然も人類のためにもっとも発展的な方向と結びつけて、具体的に把みあみだしてゆくことの重要性を一層深く痛感させられたものでした。

正に、土井氏はもちろんのこと、大本の指導者の方々^{かた}が切に想われるところも、また私の念ずるところも結局はただ一つであります。それは、単的にいえば神の大悲の意図を実現させることであり、具体的には救われざる人類を救済する道を切り開き導いて、人類をして地上天国を建設するまでに発展せしめ、その過程を通じて神界幽界、現界の邪悪分子を全部改革（立替え）するといふ靈的にも体的（客観的）にも——まだ人類の歴史上かつてみることのできなかつた——壮大極まりない、神と人間との有機的、弁証法的な協力関係”を、積極的^{きふ}にしかも普遍的に樹立する最深、最高の大立替え、大神業の展

開に他なりません。したがって、このような大神業に対して『大本』に課せられている偉大なる大使命を完全に全うするためには、そこによこたわっている容易ならぬもろもろの障害と困難の幾多を、その大立替えの過程における諸段階に見事正しく対応しながらのりきらねばならず、それだけに大本人の靈的大精神には“大立替えの過程全般を把み、その諸段階を深くよみとる”ところの限らない叡智との統一が一層重要な意義をもって求められていることはいうまでもありません。

言葉を変えていうならば、大本がその大使命を果すためには、まず何よりも神の本来絶対の意に生き、神の立替えの性格と内容と方向をわれわれ人類の“歴史的世界”と正しく、しかも具体的に結びつけるところの叡智をもって、教団全体を正しく導くことによって、『大本』をもっとも惟神的、歴史的焦点にたった統一と前進をさせることこそが、現在の大本にとって緊急にして重大な課題でなければならぬということです。何故ならば、このことよって大本の靈的大精神の偉大さは、歴

史的、社会的にも一層體的に深く人類を救済してゆくところの現実的な神力としてあらわれることになり、したがって、それは必然的に広汎な人民の靈魂に入りこみ浸透して、人民大衆の靈の中核（要）としての指導的地位を確立することが現実的に可能となるからです。そしてこの地位を基礎づけることはとりもなおさず直ちに、広汎な人民大衆を大神業にそって導き、積極的に参加せしめるという。大本の大使命にとつては不可欠な重大な条件を切り開くことであつて、そのことはまた、神の大悲は、ここにおいて始めてその本来の大愛の意向を、立替えの過程に發展的に惜しみなく顯現することを現実的、具体的に可能とし、神の大立替えはもつとも完全な本来の様相をもつて展開されるようになることを意味するものでもあります。

このように考えたりますと、現代の緊迫したしかも複雑きわまりない国際、国内の諸状態のからみあいと合せまわつて、いよいよもつて大本の今後のあり方の重大性が痛感されてきますと共に、世界に型を示すべき大本人

が、人類の危機を大救済しうる道を歩むか否かは一にかかつて、その絶対的導きの道を深く内包し示唆するところの『神諭』のその深遠性を如何に深く参究し、この現代の「危機的世界」の過程と、その諸段階に如何に真に正しく、具体的に対応させながら深く、發展的に結びつけられ得るかどうか、すなわちそれだけの叡智を發揮することができるかどうかという問題に帰し、大本人の全てがこの具体的な「智」を与えられることの必要性と共に、それは、いくら強調しても強調しきれぬ緊急重大な課題であることが、身に沁みて理解されてくるはずであります。私は以上のような見地から、この機会を活用して土井氏の書翰によせながら、そこから得た基本的な問題点を——参考までに私の所信をおりませながら——いささか触れ指摘してみたいと思うものであります。いうまでもなく、このような大事は、大本人の全てが積極的にその見解と智の限りを出しきつて、その道友的批判と協力による厳肅にして真剣な参研、検討のなから、始めてその深遠な『神諭』の真意義をもつとも深く具体的に

にいらされることが許されるのであります。そしてそのような真剣な努力と協力のあり方の中から、大本の一層の統一と発展が飛躍的に生みだされてくるに違いありません。この意味で、土井氏と私の因縁とその真意が深く生かされ、至らぬ私の見解に対して心ある方々の峻厳な御批判と共に、このことが一層の積極的な大本的、道友的統一に何らかの役割を果すことを、切に希い、期待するものであります。

二、根本問題は何か

土井氏の書翰を拝見して、私がまず申し上げたいことは以前の小文で私が始めにのべました一文、すなわち「土井氏がその著の始めでせつかく、〃立替え立直し〃の関連性を正しく説明されておりながら、三分説を宿命的、絶対的なものとして論証されることによつて、結果的には始めの説明と反する一面的な見地に転化されるという、矛盾に陥入っておられることをまず指摘したいと思います。何故なら〃世界は

三分になるぞよ〃の神論の意義を人類の絶対的な宿命として受取るということは、とりもなおさず神と人間の能動、受動の有機的、弁証法的な根本原理を否定し、立替えと立直しを無関係なもの、相互に孤立したものととして切離した結果の解釈であり、「立直し」が立替えのもつ真意義を見落し「立替え」を固定したものとすることによつて「神の」絶対能動性も「万物」の絶対有機性もまた、天地経綸の主宰者としての「人間」の使命もすべて否定されることになり、氏が始めにのべられた説明と全く矛盾せざるを得なくなるからであります」

の中の〃三分説を宿命的、絶対的なものとして論証……」「人間の」使命も全て否認されることになり〃云々の私の文を、土井氏が取り上げられて

〃人間の神に対する協力、努力を無視して絶対宿命などと申すものではなく〃……〃でありますから、あの小冊子にも「三分は四分になり五分になるかも知れない。残るものが多い方がありがたい次第であ

って、何も三分と限定することはないとも記している”

ことを指摘され、神諭を引用、説明されながら”ほって書いても「三分」は残るという意味では決してない”ということを強調されていることについてであります。即ち、

”本来、絶対的宿命とも申すべきところは全部だめだということにあります”（しかし）”神様の御設計、御企図、つまり御経緯によって、ひっきょう神と人との「能動受動の有機的」協力、努力によって、大体『三分』というものが残り得ることになるべきは、そのもので、『三分』はほっておいても残るはずのものではなく……かくて『三分』ということが、神様のお見込で、『三分』そのものが本来、絶対宿命的なものではないのであります”（だから）

”…宿命だ、もう何もする必要はないというのではなく、覚醒した者が最善の努力を尽し、日夜に祈ることによって大体三分に達し得るものと信ずる次第であります。三分は宿命だ、今後はもうほっておけ

ということになれば、三分は残り得ないで、一分五厘とか、二分とかしか残らないということになるべきものと存じます。”

とのべられて、神諭の引用とその解釈からの、この結論とその主旨をくり返し強調されておられるのであります。が、まず私が問題点を提起したいと思えますのは、この点に関してであります。

私が”三分説を宿命的、絶対的なものとして論証：…と記したのは”三分が立替によって残される人類の絶対的な割合であるとか、ないとか、またほっとおいても三分は残るとか、残らないとか”を問題の観点としたものではなくて、土井氏が「三分」にして、「五分」にして、ともかくも、立替えの大峠には人類の大半以上の破壊は絶対まぬがれないものとして受取り、その見地から説明されていることを指しているのであって、言葉を変えていうならば、氏は、神の立替えによるみろく浄土（地上天国）の建設のためには、”人類のかつて経験せざる想像を超越せる戦慄すべき大惨事”（「大本の天業

使命」より）がその必須の前提条件——大峠における絶対の内容として——として仕組まれていると受取っておられることに対して、それを指摘、意味する言葉であるということでありませぬ。

そして、私が提起したい『三分説』に対する受取り方の根本的な問題点は土井氏の説かれるように人類の大破壊が「立替え」には絶対必然的な、動かすことのできない条件であるか、それとも私が受取っていますように三分説に関する数々の神論の真義を「立替えの大峠の段階にともなうて顕現する非常な可能性」の条件が既に神界に実在していることを、神界と現界の有機的、弁証法的な陰陽の聯関作用の、それぞれの側面または両面的な見地に応じ、その諸段階の靈妙にして峻厳なる發展と人間界の変化の弁証法的対応関係の角度から、奥深く予言されたものであつて、それはまた「このまま行けば本来ならば大破壊を必然的にまぬがれ得ない、この救われざる人類を何とか大救済せんとする神の大悲の意図と道をも合せて奥深く示唆されている」として説明するか、

どうかという問題であります。

このことを正しく説明することが何故必要かと申しますと、その相違によつて「神の立替え」に対して具体的には如何なる道（あり方）をとるのが『大本』として、もつとも正しいのかという問題、つまり立替えの根本性格とその本質的内容の受取り方によつて、世界に型を打ち出すべき大本の基本的な方針が質的に異なることになりそれはとりもなおさず、大本人の神業参加に対する判断のあり方と努力の方向をおのずから異なつたものとするからであります。更に具体的にいえば、「覚醒した者が最善の努力をつくすことによつて始めて大天人類の三分が救済され、地上天国が建設される」ということが動かすことのできない立替えの条件であるならば、大本人の努力の方向は必然的にこの「大破壊」という来るべき「事実」に正しく対応したものにならなければなりません。しかし、覚醒した者が真に神的に正しく努力し、協力して進むならば——大本人のその努力のあり方（道）によつて——「神界」における本来の神氣（大悲愛善の大精

神)と神的善氣(善靈)にもっとも發展的に結びつくことになり、神と人間の能動、受動の有機的、弁証法的な陰陽の螺旋作用という大宇宙の根本原理によって、既に実在する。人類の大破滅の危機に著々と向かい、運行しつつある一大靈氣に、もっとも積極的な反作用が加えられて「大破滅顕現の非常な可能性が、大救済への必然的可能性、引いてはその顕現化へと転化」させることができるものならば、大本人のその祈りと努力の方向はいうまでもなく、この大使命を果すべき具体的な導きの糸(型)を正しくあみ出し、それによる真剣な実践行と祈りの統一という方向(向)に進まなければならないことはいうまでもないことでしょう。

そして、つづめるところ根本的な問題点はここにあるのであって、大本の使命の対象を如何に定めるかによって——人類の滅亡的「大峠」の顕現を絶対肯定する立場と、その神界における実在を肯定する立場とは、一見同じようにみえて質的な相違と共通点があるために——「最善の努力」といっても、それは客観的、具体的には

共通点もありますが同時に方向的にも内容的にも質的に異なったものとなることを、以上からも深く理解する必要があると思います。

例えば早い話が、現代の如き人類の破滅を現実的に可能としている「恐怖核兵器」のいよいよの発達と、世界の「緊迫した諸条件」のもとにあって、「吾関せず」とそれをそのままほっておくことは、結局それを更に助長することになり、引いては必然的に「大戦災」と核兵器による気流、海流、地流などの大変化、「大天災」を招来して、人類は遂には必ずや全滅するであらましよう。もし、「最善をつくしても大体三分位しか残らない」という見地にたつならば、それは始めから人類の大破滅を肯定する立場である故に、人類の破滅を現実的に想わず「諸条件」に対して、その実践行にははっきりした——その「諸条件」を發展的に転化克服しようという——確信と見透し(光明)をもつことができず、したがってその折角の「最善の努力」にもかかわらず、その努力の方向は人類の大破滅を肯定する限界と見解のもとに展開さ

れることになり、それは大戦災、引いては大天災を断乎として喰い止めようとする力と方向を生み出すことはできないでしょう。そこで、その見地にたつ「最善の努力」をもってしては必然的に

大正六・旧九、五日

「戦争と天災とが初まりたら、人民が三分に減ると初発の筆光に書いてあるなれど、ここに成ると、世界に残る人民が二分位よりないぞよ。日本の国には誠の者が二分残る仕組であれど……」

大正六・旧十一・二三日

「初発からの筆先に今度は世界が三分になると、毎度申して知らしてあるが、世界は三分になると、というような事態（実在の顕現化）を招来することになるのであります。しかし、「否や、人間と神の協力のあり方（具体的には人間の「最善の努力」のあり方）によっては——大本の型の打出し方、導き方によっては、そのような恐怖の破滅的条件と戦争勢力を完全に押え、変えさせ、克服して、人類の大救済即大発展（地上天国の

建設）を現実的に可能なものとすることができる」という見地に立つならば、それは先きの両者と全く異った実践とならざるを得ません。

そして、この立場、この実践そのものが「人間」にして神の絶対の大悲と融即した姿であり、深くは「神」本来にさせられている姿であり、神の絶対大悲の「一厘」の仕組の姿でもあります。それはキリスト教の終末観にみられるような消極的な「信者」のみの救済とか、また改心した者のみを救済の対象とするような狭いものではなく、何としてでも救われざる者をも絶対的に救済し、しかもその過程を通じて絶対的に「改心」せしめる道。を切り開き、導こうとするものであります。親鸞は「善人なおもて救わる。まして悪人をや」という、如来の深い慈悲を示した有名な一句を残しておりますが、『大本』はその深さをも超越して個人的な魂の救済に止まらず、人類的・歴史世界的な大救済をもたらし、その段階を通じて「三千世界」を、陰陽にわたり絶対的に発展しようとする「神」本来の大悲・最深・最大の体現者なので

あり、またその『大使命』に生きることこそが、大本人の絶対の道であり姿でなければなりません。ここにおいて、

「世の立替えであるから人民三分になるところまでいくのであれども、天地の御神様をおん願ひ申して大難を小難にまつりかえて、人民を助けるのであるぞよ。」

大正七・旧正・十二日

「九分九厘と一厘とでこの世が泥海に成る所を、一厘の秘密で跡は水晶の身魂ばかりに致して、末代の世を続かず経綸が致してあるから、悪の方の身魂は日本の神国の経綸は見当は取れんぞよ」

等々の神論の真義が次第に理解され、深く味われてくるのであります。

以上、根本的な問題点については私の考え方を大体説明してきましたが、これだけでは問題点の所在とその内容の意味が一応理解されるに止まり、立替えの基本的な諸問題を理解して頂くためにはまだ充分ではありません

聖師は、いみじくも『神論』には十二通りの解釈のあること、すなわち「奥の奥はまた奥あり。そのまた奥に奥がある」ことを正しく指摘されていますが、神論の真義を真に底深く覚し、しかもそれを正しく具体化するためには

一、相応の理 二、「立替」の基本的な構造、性格
内容 三、「大峠」の真義 四、神界と歴史的世界
との結びつき

等々をまず深く把む必要があると思えます。その時「神論」は一層深く正しく理解され、味われ、土井氏のいわれるところのいわゆる「立替え肯定説・否定説乃至中途半端の曖昧説」のそれぞれの一面性は、必然的に克服、解消されて『大本』の道は一層躍進的・神的なものとなり、その人類大救済の霊的の中核(要)たるべき『大使命』は、陰陽あい待って着々と全うされることになるのであります。

(未完)

▽噴水△

著者は広い読者層の中で、たった一人でも自分の真意を理解してくれたら満足すべきものだということである。「靈界物語」についても、「最後の光明」の中に

秘かに密かにただ一人

二人の真のわが知己に

注がんとための熱血か

自暴自爆の懺悔火か

我は知らずに惟神

神のまに／＼述べ伝う

と示されているが、真意が伝えられるということは、それほど困難なものであろう。

大本神論には「一人が判りたら皆の者が判って来るなれど、肝心のものに判らぬといふのも、是には何か一つの原因が無ければならぬぞよ」と示されているのである。

○

現代は「貧困」(Poverty)の時代である。思想的貧困、政治的貧困、経済的貧困である。この三Pを追放してしまわないうちは、世の中はよくならない。

宗教にて人を救ふはなまぬるし

金持ならばと今宵おもふも

これは歌集「雲珠桜」の中の直日先生の歌であるが、実際、人生における出来事が社会環境の悲劇である場合があまりに多いのである。その環

境の根本は、家庭の貧困である。

○

大本は世界の発電所とならなければいけない。その電気が何に使われようと、要は世の中を明るく、温かにしたらよいので、大本の教——愛と信によって世界が平和に幸福になったらばよいのである。必ずしも、人類がみないわゆる大本信者にならなければならぬというわけでもなくまたそういうように努力しなくてもよいであろう。人類愛善の大精神によって世界が生かされたらよいのである。

編集後記

▽過般土井氏の「大本の天業、使命」というパンフレットが全国各地に配られて、立替え立直しの問題がまた新たに取上げられるようになった。しかし、あのパンフレットは、もともと

部内の研修用のために印刷されたもので、本誌には土井氏の「神国建設の天業」と題する一文をのせることにした。

▽大國氏には、また別な角度からの「世界情勢の変貌と立替えの実証」と題する一文が寄せられた。これは、大本開祖大祭時に綾部で行われた全国地方機関代表者総合研修会における、大國氏の基調講話と大体共通したものである。▽わたくしの「大本の基本思想、立替え立直し」については、教学の上から

観た私の見解を示した。

▽佐々木のぼる氏の「大本の天業使命の問題点について」は、第三者の立場から立替え立直しの問題を述べたものである。いわゆる信仰にとらわれていないだけに、かえってよく問題の本質をつかんでいると思う。

▽外部からもこのような声がある。「弾圧以前の大本は世の立直しを主張し、メシヤ的色彩が強かった。然し、再建後の大本では、世の立直しは日本の敗戦によって成就し、神の子としての生活に入ったとする楽天的雰囲気強いように感じられる。神の子として地上に神の国を建設し、まことの平和をもたらすためには、倫理の問題を切り離すことが出来ない。すなわち、信仰者としての倫理的な生活の問題が取り扱われなければならない。また、果して三千世界の立直しは既に成就したのか、何

時、如何にすればそれが完成するのかわかるといふ終末思想も倫理の問題と共に明らかにされねばならない」(おほもと誌、八月号所載の小林栄氏の「救済宗教としての大本」参照)

▽本号だけで全部まとまりをつけるには余りに大きな問題なので、漸次本誌において、説明してゆきたいと思っている。(桜井)

昭和三十五年十二月一日印刷
昭和三十五年十二月七日発行

「大本教学」第三号

(非売品)

編集兼
発行者 桜井重雄
印刷者 土居重夫
発行所 大本教学院

京都府亀岡市天恩郷